

方

向

參

目次

襦機

原田憲雄……(一)

夜の歌

原田憲雄……(三九)

雙岡隨想

中新敬……(四九)

禍

機

原田憲雄

中藏禍機不可識

—李長吉をめぐって—

河南府試は合格であった。冬、韓愈は合格者たちを招いて宴を催した。新唐書選舉志に「毎歲仲冬、舉選の館學に繇らざるもの、これを鄉貢という。皆な牒を懷にして、自ら州縣の試に列して已めば、長吏は鄉飲酒の禮を以て屬僚を會し、賓主を設け俎豆を陳し、管絃を備え少牢を用いて、鹿鳴の詩を歌う」とある。この例にならうたのである。長吉も當然宴に列したはずである。退之に詩がある。

吾の皇祖の烈を紹ぎ、天下再び太平となりぬ。詔のり諸郡國に下り、歲ごとに鄉曲の英れたるを貢せしめたい。元和五年の冬、房公（式）東京に乎たり。功曹、公に上言す、「この月、當に名を登すべし」

と。乃ち二十縣より選ひ、試官、鴻れたる生ひとを得たり。羣儒は己の材を負み、簡擇ふことの精しきを相質しぬ。(そのさまは大鳥の)怒おこ起ち羽翮を箴げ、吭を引いて吐くこと鏗鏘たるがごとし。この都は周公のとまより、文章して名聲を繼ぐ。絶はた殊尤るるに非れば、(世の)耳目をして驚かせ難し。今(他の受験者たちは)震い薄さるるに遭い、聲を出して鳴く能わす。鄙夫縣尹を忝うすといえども、(し)かしきみたちにむかひ愧じ慄れ情を爲し難し。惟た(きみらがよき)文章を寫さんことを求め、妬むと争うとを敢てせず。家に還つて妻兒をして、この煎と魚と烹とを見えしむ。柿は紅にして蒲萄は紫に、肴と果と相い扶繁す。芳茶は蜀門より出て、好酒は濃く且つ清し。何にかして能く歡ひの燕に充て、庶くは以て歆の誠を露わさん。昨聞く、詔書下り、權公(徳興)邦の楨(宰相)と作れりと。文人その職を得たり。文道當に大いに行わさるべし。陰風、短日を攪し、冷雨、流つて晴

れず。勉めよや。徒らに駈けるを戒めよ。家國。子らが榮を遂つ。

(燕河南府秀才)

「文道當に大いに行わるへし」退之のこのことばはそのまゝおのれの前途の光明を約束するものと響いたのであろう。長吉は他の秀才たちと勇んで東都洛陽を發し、長安に入るのである。唐の制度によると文官登用の第一次試験、長吉の場合でいへば河南府試にパスしたものを「進士」とも「擧進士」ともいふ、通稱「秀才」といった。秀才は十二月二十五日戸部に集り、翌年正月、禮部の試に就くのを例とした。禮部の試にパスすると正式に文官たるの資格を獲得し「進士第」または「前進士」と上はれる。さきの退之の詩に見える權徳輿が禮部尚書同平章事となつたのは元和五年九月丙寅であつた。長吉が長安に入つたのは多分十月初旬のことであろう。とすれば、禮部の試までになお三ヶ月あらかけである。この間に長吉の上におりかゝつて來たのが、退之の招宴の日に溢つて晴

れなかつた冷雨よりなお冷い運命であつた。すなわち諱事件である。

元和の中、進士李賀は善みに歌篇を爲りぬ。韓文公の深く知重する所にして、縉紳の間に毎に延譽を加う。此れにより聲華籍がること甚し。時に元相國稷、年少にして明經もて第に擢んでうれ亦た篇什に工なりき。常に交りを賀と結ばんと願ひ、一日賀を執りて門に造りぬ。賀、刺を擲つて答えず、遽かに僕者をしていわしめて曰く、「明經擢第のひと、何事そ來つて賀を看人とせらるる」と。相國また情を致すなく、慚じ憤りて退きぬ。その後、左拾遺より製作科目に登り、要路に當きぬ。禮部郎中とならに及び、因つて議して、賀の祖禰の諱は、晉なれば、進士の擧に應すべからずとなす。賀もまた輕薄なるを以て時輩に排せられ、遂に輒軒をなしぬ。

唐の實録の『劇談錄』はこのように語っている。元稷とは、白樂天と

をうんで「元白」と稱せられる詩人元微之のことである。微之はたしかにこれくらいのことにはやりかねない性格の男ではあった。けれども、その明經擢第は長吉三歳の年であり、祠部郎中となつたのは長吉死後の元和十五年である。元和五年には事に坐して監察御史より貶せられ江陵士曹參軍となり以後、通州司馬、虢州長史などを歴任してゐる。少年長吉にかゝつてその父の諱を穿鑿してゐる暇は、この時期にはなかつたはずである。

たゞし、たとえ相手が元稹であろうとなかろうと、そしてその男が彼に不幸を齎らすものであろうと幸運を持來たすものであろうと、それが竊の好かぬ者である場合おのれの感情を押し殺してこれに對うような殊勝な男で長吉がなかつたことはこのエピソードが描いてあますところがない。倨傲の人に才なきときは笑ひを買つて済む、才あるときは人の憎しみはやむことがない。かつ、文人に妬嫉はつきものである。長吉と文

名を争う者かこの舉に出でることにはけだし油が火をひくと一般であつた。こゝろした長安での形勢を見て皇甫湜は急ぎ退之に告げた。退之は直ちに諱の辨を著して之に對するのである。

・愈 李賀に書と與えて、賀の進士に擧げられんことを勸む。賀進士に擧げられて名あり。賀と名を争う者これを毀つて曰く「賀の父の名は晋肅なり、賀は進士に擧げられざるを是とす。これに擧げられんことを勸めし香を非となす」と。聽く香察かにせずして和してこれを唱うること同然一辭なり。皇甫湜曰く「若し明白にせばんば、子と賀と且く罪を得ん」と。愈曰く「然り」。

律に曰く「二名は偏諱せず」之を釋する者曰く「謂うことろは孔子の母の名は徵在なれど」徵を言ふとき在を稱せず、在を言ふとき徵を稱せず若き是なり。律に曰く「嫌名を諱まず」之を釋する者曰く「謂うこ

ころは、禹と禹と、兵と、蓋との類の若き是れなり。今、賀の父の名は
晋肅にして、賀の進士に擧げらるるへを不可なりとするは、二名の律を犯
すとすか、嫌名の律を犯すとすか。父の名晋肅にして子進士に擧げ
らるるを得ざれば、若し父の名仁ならば子は人（ひと）たるを得ざるか。
夫れ諱は何れの時に始りしや。法制を作つて以て天下に教えし者は周
公・孔子に非るか。周公は詩を作つて諱まず、孔子は二名を偏諱せざり
き。春秋は嫌名を諱まざることを議らず、康王釗の孫は實に昭王たりき。
曾參の父の名は皙なりしが曾子は皙を諱まず。周の時に駢駢なる人あり、
漢の時に杜度なる人ありき。これその子はよろしく如何に諱むべかり
し。はたその嫌を諱みて遂にその姓を諱まんか。はたその嫌なるものを
諱まざらんか。

漢には武帝の名を諱みて徹を通とせしかども、また車轍の轍を諱みて
某字とせしことを聞かず。呂后の名を諱みて雉を野雞とせしか、また

治天下の治を諱みて某字とせしことを聞かす。(唐の太祖の諱は虎、太宗は世民、世祖は昝、玄宗は隆基なるも)今、上章と詔とに、濟勢秉機を諱むを聞かす。惟た宦官宮妾は乃ち敢て論と機とを言わば、以て觸犯すとなす。士君子の言語行事は何れの所に法守すべきや。今、之を經より考え、之を律に質し、之を國家の典に稽かえて、負の進士に擧げらるるを可となすべきか、不可となすべきか。

凡そ父母に事えて曾參の如きを得ば以て譏るなかるべし。人となつて周公孔子の如きを得ば亦た以て止むべし。今世の士、曾參周公孔子の行を行ふことを務めあして、親の名を諱むはすなわち曾參周公孔子より勝れんことを務む。亦たその惑えるを見るなり。夫れ周公孔子曾參は卒に勝るべからず。周公孔子曾參に勝つて、乃ち宦官宮妾に比せば則ちこれ宦官宮妾のその親に孝なるは周公孔子曾參より賢れる者か。

平生簡潔な文章を行ふ退之としては随分くどいが、これも、讀ませねばならぬ相手の「宦官官妾」やそれに類する者たることをおもんばかつて、老婆のことばのごとく重複を厭わず、ひたすらに趣旨の徧からんことと努めたのであらう。

中夏にあつては諱についての周到な注意なくしては一日も過すことばできなかつた。人を訪れて、もし主の亡父の諱を口にしようものなら、忽ち主は號泣するであらう。もし公文書に天子の諱でも記そうものなら、その人は官職にとどまることはもとより、生命の安全さえ保ちがたかつたであらう。ことに唐の代には諱についてのいましめがきびしく中宗の諱「顯」、玄宗の諱「隆基」をははかつて、それよりさきの年號の「顯慶」を「明慶」、「永隆」を「永崇」といふかえたといわれ（細知）、文官試験の課題に祖宗の諱に出會した受験生は「氣分が悪くなつたから退場休養したい」と願ひ出るのが習わしであつたと宋の錢易の「南都新書」に記

している。

このような社會にあって「諱の辨」を發表したということは、よほどの決斷と長吉に対する愛情がなければできないことであつた。と同時に事態の急迫を告げるものでなければならぬ。「予と賀と罪を且くせん」と皇甫湜にいわしめたのは退之が發題せんために假りに籍つたというようなものではなく、事實だつたのである。不思議なことは、かく急迫した事態に陥つた退之と長吉に對して、皇甫湜を除いては聲援に乏つたもののあることが明らかでないこと、諱問題を持ち出した側からの反論が見えないことである。前者については、「諱の辨」の贊論が當時に存して今は亡んだとしても一應推せないことはないが、以後これに觸れたものがないところよりすれば、まずはそのようなものが出なかつたとみてよく、むしろ韓門にあつてもひろく愛せられることのなかつた長吉の性格がたしかめられる風情である。たゞし、問題は好惡によつて打ち捨ておけな

ない意味を帯びはじめている。先王の道が諱のごとき偶然によつて左右されるか否かの瀬戸際にあるからである。孔子の教を奉ずる士君子ならばこの歧路に面して起たざること能わぬはずである。退之は諱の辨を草するみぎり、士君子群の蜂起を夢想しないまでも、少くとも聲を合せて道理につく数十の人を期待したと考えてよいであろう。この期待があればこそ一長吉をめぐる事態を周公孔子の道に結びつけることを敢てしたのであらう。危険極まりない方法であつた。退之はあつたの論理の絶対不敗と信じたに違いないが、敗れたときに來るべき結果をソロバンにおいたならば、恐らくこのような方法ほとらなかつたであらう。なぜか知らぬ。その敗北は周公孔子を不忠不孝の徒とすることであり、儒教の崩壊であり、中夏文明の顛覆であるからである。

論理は敗れなかつたか、退之は敗れた。原子爆弾は不發に終わったのである。聲に應じて立つたものなく、あつたとしても極めて限られた数であ

「たろう」敵には何の反應もあらわれなかつた。もしも反駁が明らかを
形をとって提出されるならば、戦いは論理の場に移され、自然の勢とし
て退之の合理主義が勝利を占めるであらう。事實がそう運ばなかつたの
は敵が一個の人格でなく、その武器が道理の外にあつたからである。す
なわち、口から耳にひそかに傳えられ、やがて波のごとく人の感情をひ
たしてひろかつてゆく流言だつた。流言は論理をもたない。それゆゑに
諱の辨に立ち向い得なかつた。この無能力が結果的には退之無視といふ
効果を引き出し、同時に、世人の感情をより強く捉えていつたのだ。

道理をたのみ人は心理の計算においてこのやうな過誤を犯すものであ
る。これに反して、退之によつて、宦官宮妾の類と蔑すまれた人々にとつ
ては心理の計算そのものが生活であつて呼吸よりも自然に體得された技
術であつた。

道理計算者と心理計算者との力の比重は今日においていささかも變

るところはない。再軍備論がなせ平和論を壓倒するのか、マツカトシイ旋風がなせアメリカの良識人の聲よりも強いのか、前者が心理計算家で後者が道理計算家であるからではないか。

それでも道理そのものが滅んだわけではない。諱の辨が敵によって無視されたとしても、その正論たること、今日もなお讃む人の絶えないに、よって明らかである。千萬人といえども敢て往くべきであり、一度や二度の敗北によってやむべきではあるまい。

このような議論がもし出さねないでもあるまい。いかにも充して、こゝに孔孟の後継者をもって自任する退之にとつては教しんで甘受さるべき意見である。けれども當時の事情に即していえばやや酷薄に失するであらう。

諱の辨のさしあたっての目標は正論を天下に展べるにあつたのでなく、長吉の救済と併せて退之自身におゝいかつてくるであらう災禍の防止

あつた。不發に終つたとはいへ諱の辨の潜在爆發力は災禍防止には十分
役立ちたるう。長吉救済にはいふれ退之以外の手を籍りねばならぬ。
その手は當然言中に向つてのひるものであろうが、其處に蟠居するの官
官宮妾の類である。退之が正論をふりかざしてあくまで闘えば、彼らの
うちの數名を犠牲にあけることは可能であらうが、犠牲は「官官宮妾」
の幕を硬化させ、長吉救済の手をその幕より深いあたりに到達させるこ
とはないであらう。たとえ到達させることがあるとしても、そこまで事
を運ぶには長い時間を必要とし、かつは退之がこれに専念せねばならぬ。
退之は友人後輩に篤くかつは仁義を信條とする人ではあつたが、なほ榮
達に思ひを斷つた訣ではなく、現に官職にある人、門人の進退につとめ
を曠くすることは許されなかつた。假に退之が官職を抛ち榮達を斷念す
るといふても門弟たる長吉としては、拜してこれを辭退しなればなら
なかつたであらう。

さきに略記したように、長吉は諱事件の後數ヶ月にして奉禮郎の職に
ついでいる。これは長吉が進士の試につくことを斷念し、宦官宮妾の
面子をたてることを條件に、この前後に約束せられたものだとする想像
をいさなえないでもない。もしそうだとすれば、このためには韓愈、皇
甫湜の奔走けしちろんながら、長吉の友の権璩の力もあまかつて大きな
力をなしたのではないかと推される。権璩は、さきに引いた退之の詩中
に見える宰相權徳輿の子である。

私がかつて、長吉の詩にあまりに深く諱事件がかげさしていることを
訝しく思ったことがあった。たしかにこの事件によつて長吉はその前途
をばづまれたに違いない。しかしながら八十を過ぎるまで進士の試をう
けては落ちて倦まなかつた詩人も少くはなく、官途についてつかぬか
た人もまた數えるにいとまはない。由來詩人に不遇はつきものであつて
その間に晏如たる達人もわれわれは往々にしてこれを見ている。長吉は

卑官とはいえなむ奉禮郎の職を得、かつ生前に詩名を謳われることを獲てゐるのである。それだけでも幸運だつたのではないかと。

けれども、學校生活を終つて世に出て、戦時戦後の變轉逆轉する世相のうち、身をおいて、たゞ生きるだけにすら限りない障礙に出會し、想像だにしなかつた社會の表裏を見せつけられるに従つて、長吉といふ一人の詩人の上におゝいかぶさつた中晚唐の時代の暗さと、それを歌わずにあれなかつたこの詩人の心情につきあたらざるを得なかつた。

唐の世は安祿山、史思明の大亂後、急速に頽勢を現し、憲宗の治世となつて、内には淮西節度使吳元濟の亂、淄青節度使李師道の亂等を治め外には契丹、回紇、吐蕃、南詔などに對してもかろうじてながら權威を保つことを得て、やや勢をとリもどすかに見えた。元和二年に宰相李吉甫が「元和國計簿」を呈上したが、戸税は天寶の時に比べて四分の三を減じ、兵費は三分の一を増してゐた。こうした財政から内外に右の如く

き功とあげるためには、どこかに無理があるはおである。苛酷を徴税、
悪貨の流通、徴兵、ク役がそれである。さらに政治家、官僚たちの間に
は朋黨が生れ、宮中には宦官がバツコして立派、行政、司法、軍事の各
面にその力が加わる。

錦襜褕

繡襦袴

強飲啄

哺爾雛

隴東臥穢滿風雨

莫信龍媒隴西去

齊人賦網如素空

張在野田平碧中

網絲漠漠無形影

誤爾觸之傷首紅

錦の襜褕

繡の襦袴

強めて飲啄

ましめて爾雛を哺くむ

隴東になびき臥したる穢に風雨は満まり

信する莫は龍媒らの隴西に去りぬとこと

齊の人の織りたる網は素空の如

張りめぐらしぬ野田の平碧の中に

網の絲は漠々たて形影もあらぬた

誤りて爾を觸れをば首傷れて紅にさみなる人

艾葉綠花誰剪刻

中藏禍機不可測

艾の葉はた綠花を誰剪刻りてあきし知らねと

その中に禍機藏めありとし測るべからず

(艾葉如張 皿、四)

天下のいたるところにカスミアミが張りめぐらされてあつて人民はいつその中に陥るかわからぬ。天子すらその禍機はさげようとせぬ。憲宗皇帝はその十五年の治世の終りに一宦官の手で弑せられ、以後、皇帝の發之がみだりに行われていたのである。

諱事件は事件そのものとして、單に一人の青年が文官試験をうけえなかつたというにすぎない。だがこうした社會のひずみを反映して、いとこの點でたゞその象徴的ではないか。

政治というものはもと人間の社會が豊かに安らかならんことを目指すものであり、政治力というものはこの目的を達成するための技術であるべきは明である。にもかゝらわらず現實には、政治とはしばしば政治

に關與する人間間のトラブルそのものとなつてしまつて、豊かに安らかに
ならしめらるべき人間は無視される。天は中夏の指導者、理念として政
治の根源、すなわち人間間の社會を豊かに安らかにならしむべき方式の基礎
であつたが、政治が軍に政治家たちのテイクタクにすぎなくなつたとき、
天はまた彼らの都合のよい姿に描き直され、それはただ權力者の行動を
正當化するメテオたるにすぎなくなるであらう。かく墮落した天をい
かなる詩人が頌えうるであらうか。天はもはや萬物を生成したあの蒼
蒼たる天ではなく、人間を無知と無力の中に閉じこめようとする壁にす
きない。そこには全き停滞が存在するにすぎぬ。人かこの停滞の中に生
きるということ、死の中にあるということである。この壁に圍まれて
今お頌歌者たろうとすることは没法なと呟くこと、でなければ何か爲に
すうとせろかあるもみばほかならない。長吉が「中藏禍機不可測と歌つ
た「禍機」とは正に死を生とし生を死にかえ、無法を法とする權力の虚

妾を指していうのであった。このようにカラクリに逢つて轉倒するのは詩人にとつては當然であり、その轉倒が、虚偽なる生からの覺醒となり、天なる「觀念」への反逆となるのである。

長吉は遂に身をひかざるを得なかつた。重い心を抱いて長安を離れ昌谷に歸るのである。

秋風吹地百草乾
華容碧影生晚寒
我當二十不得意
一心愁謝如枯蘭
衣如飛鷄馬如狗
臨岐擊劍生銅吼

秋の風地を吹きて百草乾き
華の容も緑の影も晩寒しすかたとなりぬ
我れ二十はやくもことの意とたかい
心は愁いに謝されぬ枯れたる蘭のごとくに
衣は鷄のごとくにほけ狗さながらの我馬よ
岐路に立ち劍を撃てば銅の響うたてし

旗亭下馬解袂衣
請費宜陽一壺酒
壺中喚天雲不開
白晝萬里間淒迷
主人勸我養心骨
莫受俗物相填礙

茶をいさぐ存ありて馬を下り衣くつらげ
まおみぎのうは一壺の宜陽の酒を
壺中の天と誰か言いし喚べども雲の聞けざる
晝しらじらとなへて世のかくすまじき
ときに主の勸むらくあわれ君の心強く
おろかなるやからのそしりおもしろたまいにそ

（開慈歌 Ⅲ ⅤⅥ）

旗亭の主のなくさめにすら心を動かされるほどに傷んでいた長吉は、
そこでよふつた酒の勢いで昌谷に入ろうとするのだが、家が近づくにつ
れて、また心は弱々しくなされていく。

雪下桂花稀
啼鳥被彈歸

雪の下に 桂花のはなはひらかじ
啼きしばかりに鳥こは弾たれて歸る

關水乘驢影

秦風帽帶垂

入鄉誠可重

無印自堪悲

卿卿忍相問

鏡中雙淚姿

驢馬を歩ますわが影は水の面みにありて

長安ふりの帽の帯しなえて垂れぬ

ゆゝしかるわれの歸郷も

あわれあわれ帯がぬべき印しるししのなきに……

しめひかにきみはや問わめ

鏡の中に泣ぐみまたん姿に

(出城 Ⅲ 126)

長安につくとまず都ふりの帽をあがなつてかぶつたが、及第を疑おう
としなかつた自分の思ひ上つた氣持を、關水の流れにうつつたおのれ
の影があさわらつてゐるようにも、あわれんでゐるようにも見える。こ
の歸郷は自分にとつては重大な意味をもつてゐる。それゆゑに樂しみに
してゐたのだが、今は、おのれも人もひとしく予定してゐた擢進士第の
印も持たずふるさとの土をふまねはならない。自分の歸りを待つてゐた

妻（あるいは許婚者）はそつと聞くだらう、鏡の中になつた私が雙の
眼に涙を浮べて立つのを見たならば……

おのれの不幸、あういはあやまちの故に、しかなかつたのではない。そ
れだけに、かえつておのれをとりまく人々の嘆きを想像することの方が
おのれの不幸よりは、身にいらぬのだ。

小樹集花春

ひとたひは官途に望みと絶つて昌谷に歸つた長吉も、この山村に身を
埋み果つべくはあまりに若かつた。退之が河南の令から職方員外郎に轉
じて長安に至つた元和六年（八一）春、長吉もまた京師に赴いて奉禮
郎の職を得た。「奉禮の官は卑し」と長吉は「聽穎師彈琴歌」にうたつ
た。新唐書百官志によれば、太常寺に屬し、從九品上、君臣の版位を掌

り、以て朝會祭祀の禮に奉ず、とあり、わが宮内藤の式務官にあたる。
もとより卑官ではあるが、しかも擢進士第ならぬ長吉にとって、は必ずし
し獲やすい地位ではない。これに就くには退之や友人たちの奔走があす
か、つて力あつたに違いない。

掃蕪馬蹄痕

どなたもおいでなさうねは

街面自閉門

後所の門は閉じたきり

長鎗江米熟

なべには米が煮えていて

小樹棗花春

庭は棗の花ばかり

向壁懸如意

壁にかけたる如意一つ

當簾閱角巾

それから簾に角頭巾

犬言曾去洛

犬にたよりをもたせた

鶴病悔遊春

鶴も秦では病氣だと

土甌封茶葉

山盃鎖竹根

不知船上月

誰棹滿溪雲

さとして新茶も壺につめ

地酒もかめにしまいきり

せつかく雲間を出る月も

舟こき出して誰が見るやら

(始為奉礼憶昌谷山居 I. 8)

閑職にいて心はもとより平でなく、そそろに望郷の念いにそとられる。けれどし故なくはどまれた才あるもの、誇に揚る心はあつた。京師にあれば布衣の李白が玄宗の知を獲たよくな機会かど人なはずみてや、て來ないとも知れぬ。さらに師の退之や皇甫湜などはいうまでもない。事情を知つて文りを求める未知の人もできら。朔客李氏の如きはその一人であつた。長吉に「申胡子感粟歌」(II. 5)がある。

申胡子は朔客(北方邊地の將)の蒼頭(従卒)なり。朔客は李氏、

亦た世家(講代の家)の子にして江夏王の廟を祠するを得たり。當年

踐履序を失す。遂に官を北部に奉ず。自ら長調短調を學ぶと稱す。久
しうして未だ名を知らず。今年四月、吾と長安の崇義里に對會す。遂
に衣を將て酒に漬し予に命じて合に飲まむ。氣熱し酒闌わたり。因
つて吾に謂ていわく、「李長吉、爾は徳が長調を能くし、五字の歌詩を
作るを能くせず。直と強いて筆端を回らさば陶（淵明）謝（靈運）の
詩と勢の相遠さかること幾里ぞ」と。吾れ對えて後、請うて「申胡子
廣葉歌」を撰ぶ。五字を以て句を斷つ。歌成らば、左右の人合謀して
相唱う。朔客大いに喜び、觴を擎げ起立し、花娘に命じ、幕を出で、
徘徊し客を拜せしむ。吾れ、直しき所を問うに、「善乎善」と稱す。
是に於て弊辭を以て聲に配じ予が契に壽を爲す。

顔熱感君酒

君が酒に顔ほてりぬ

合嚼蘆中聲

吹かんかな蘆中の聲を

花娘簪綏安

歌ひぬのかんさし垂れぬ

休睡芙蓉屏
誰截太平管
列點排空星
直貫開花風
天上驅雲行
今夕歲華落
令人惜平生
心事如波濤
中坐時々驚
翔客歸白馬
劍弔懸蘭纓
俊健如生猿
肯拾蓬中螢

芙蓉の屏風に睡るをやめよ
これやこの太平管に
誰ちりばめし星の座か
地を吹きて花ひらき
空かけば雲をはいらす
この夕べ 華こほられば
あわあわと過ぎしいのちの
うちさやくこゝろ潮騒
かえりみて時におどろく
さきしりは白き馬はせ
蘭のおび剣にかけぬ
ましうなすたける男ぶさみの
螢火に書かを照らすよ

また權瓊、崔植、楊敬之、王參元、沈亞之、張徹、李漢、沈子明、張
又新、陳商などの文人との交わりもひらけるのである。

長安有男子

二十心已朽

楞伽堆案前

楚辭繫肘後

人生有窮拙

日暮聊飲酒

祇今道已塞

何必須白首

淒淒陳述聖

被褐鉏俎豆

長安に男子ありけり

とし二十心はや朽つ

楞伽經 枕にうすたかく

手もとには楚辭かさねたり

人生に窮拙ありて

日ぐられば酒うちのみぬ

今すては道ふたがるに

老ゆる日を何しか待たん

すさまじやわか陳述聖

褐きて禮樂を説き

學爲堯舜文

時人責衰偶

柴門車轍凍

日下榆影瘦

黃昏訪我來

苦節青陽皴

太華五千仞

劈地抽森秀

奇古無寸尋

一上憂牛斗

公御縱不憐

寧能鎖吾口

李生師太華

堯舜の文を學びて

時の世にうとみ責めらる

柴の戸にいたる車馬なく

榆のかけいたくほそきに

たそがれに訪い來しきみや

みさあまもりいたくやつれぬ

太華山かの五千仞

地をさきて天にぬきいす

かたえにはくらふるなくて

北斗にもしせまらんとする

時めける人いわすとも

わが口をたれかとささん

あわれわれ太華を師とし

大坐看白晝
逢霜作撲散
得氣爲春柳
禮節乃相去
顛顛如芻狗
風雪直齋壇
墨紐貫銅綬
臣妾氣態閒
唯欲承箕帚
天眼何時開
古劍庸一吼

つれづれに日すから坐せり
霜に逢い固くつぼめど
春さらば柳のみどり
さはされど禮節もなく
若のまえに狗のかたしう
空の日も壇をいつきて
キラ星とひと居ならふた
奴婢のごといきをひそめて
塵をとり芥をほうう
天の眼 いつか開きて
古の劍のごとくたけいおらぶや
（贈陳商 丑州）

尋章摘句老雕蟲

恒に小奚奴を従え、距驢に騎り、一つの古く破れたる錦の囊を背にし、
遇たま得るところあれば即ちたに書いして囊中に投じ、暮に及びて歸りぬ。
太夫人へ長吉の母へ婢をして囊を受けしめ、これを出だして見て、
書すところ多ければ輒ちいわく「是の兒かた要なすまきに心を嘔き出たして、
うち己まんとするかと。燈を上げて食を與う。長吉、婢より書せるもの
と研墨疊紙を取り、足してこれを成まめ、他の囊中に投ず。大醉と予衰の日に非れば幸ねかくのごとし。過つともまた省みざりき。

李商隱、李長吉小傳

かくのごときものが長吉の平生であつた。退之に見出される以前に
いてし、長安に出ての後もます同様であつたらう。詩に没入、いなむ
しる惑溺と稱するに近い。加うるに諱事件は彼を世務から疎外した、た

またま職を得てし至つて務めは閑である。心ならずも詩に専注せざるを得なかつた。心ならずも、とはいふたが、彼が假に諱の禍を蒙ることなく、劉務がその前にひかえていたとして、果してその心を詩に向けるほどに官職に注いたかといへば、それは甚だ疑わしい。鑑は遠きに求るまでもない。

孟東野（名は郊）は貞元中、前の秀才なるを以て、家貧しくして漂陽の斜を受けぬ。漂陽は昔の平陵縣なり。南すること五里、投金瀬あり。瀬の南八里ばかり、道の東のかたに故の平陵城あり。周り千餘歩、基趾は��陀として、裁高三四尺、草木の勢い甚だ盛んにして、率わ六椽多く、合て数十椽、藤條蒙翳して、塙のごとく洞のごとし。窪下の積水は沮洳たり。深き處は魚鱉の輩を活きしむべし。大抵幽邃岑寂にして、氣候古澹喜ぶべし。里民樵罩を除く外、入る者なし。東野これを得て

歸るを忘る。或いは日を比べ、或いは日を開き、驢に乗り、小吏を領
き、投金渚に經驀す。一たび往いて至れば則ち大櫟に蔭し、巖蔭に隠
れ、積水の亭らに坐し、苦吟して日の西するに到つて還る。爾後衰々
として去り、曹務多く弛廢す。令季操、亦急にして東野の爲を佳くと
せず、立ちどころに上府に白し、請うに假尉を以てし東野に代え、そ
の俸を分つて以てこれに給しぬ。東野竟に窮を以て去りにき。

(陸龜蒙「書李賀小傳後」)

五十四歳にしてはじめて進士の第に登り、母に仕えて家貧なる孟郊に
してかくのごとしてある。由來官廳における事務は單調にして無味であ
る。その單調と無味は人に愉悅を覺えしめる底のものではない。それ
も、これが堯舜の道につながるものと観じる人、あるいは榮達の手段と
見る人は、そこに心を注いで倦むことを知るまい。しかしながらこの單
調無味に堪えない一群の人がある。彼らとて始めから官途に望みを絶つ

ものてなく、榮達に心を煩わさないわけではない。志してなおこれに耐えないのである。孟郊然り、推敲二字の選擇に困しんで韓退之の奥に唐突した賈島然り、隣寺の僧に米を送られてかろうじて生をつないだ盧仝然り。長吉もまたこの類いの人であつたに過ぎない。

ところで東野にも長吉にもひとしく師であつた退之に次の文章がある。

往時張旭草書を善くして他の技を治めざりき。喜怒窮窮、憂悲愉快、恚恨思慕、酣醉、無聊、不平、心に動くことあれば、必ず草書に於てこれを發しき。物を觀るに、山水崖谷、鳥獸蟲魚、草木花實、日月列星、風雨水火、雷霆霹靂、歌舞戰鬥、天地事物の變、喜ぶべく愕くべきを見れば、一に書に遇しぬ。故に旭の書は、變動猶お鬼神の端倪すべからざるがごとく、此を以て其の身を終えて後世に名ありき。(中略)旭たるに道あり。利害は必ず明らかにして錙銖を遺すことなく、情中

に炎えて利欲闘進し、得有り喪有れば勃然として釋けず、然して後に
一に書に決して、而して後に恕たる幾^ゆうべきなり。(上高閑)

高閑がいわゆる「外慕の人」すなわち僧でありながら書を嗜み文人の
間に出入していた「ディレクショナル」に對する皮肉、いな、諷諭の文で
ある。諷諭の皮肉と異なるゆえんは、後者があてこすり、ばなしですます
片刃の劍たるに對し、前者は下手をするに攻撃者の背を斷つ兩刃の劍た
るところにある。こゝもと早速、退之自身にその刃が問いかけるであら
う。退之は儒たるを自負する人である。儒とは孔子の道に従う人である。
孔子に逆上專注とは聞えぬとの聲も出ようか。道を好むこと色を好むか
ごとくすとはすなわち逆上のこととて、されはこそ退之も同じ文章中に
政治における堯舜禹湯をバクチ打ちの英雄と同じ運動のエネルギーの中
で扱えてためらわなかつたのであらう。

ところで退之自身はどうか。擧んでられて比部郎中史館修撰の職につ

いたとき一向に仕事をしない。憂えて直言する者に「記録する者は刑禍あり、避けて背て就かじ」君子危うきに近よらずといふだけな澄ましよ
うである。だが孔子に春秋がある。退之たるもの、身錢切つても歴史を
書かねばならぬところであらう。こゝらで儒者と文人と看板かけかえの
手もないではなからうか、相憎退之には「争臣論」なる一大議論があつ
て、位に居ること五年なるも、その徳を視ること野に在るか如き。隠君
子諫議大夫陽城をこゝびどくやつつけているのである。まさか若氣の至
りとお茶を濁すわけにはゆくない。親友の柳宗元が「往年史事を言ひし
とは甚だ大いに謬をれり」(婁諱論)といつたとき退之はガンと腦天に
鐵棒を食らつた思ひをしたはずである。

その後退之はとしかくし『順宗實錄』五巻を撰した。この時柳州は微
笑を送つたはずであり、退之もこれに微笑を以つて應えたはずである。
しつとし『順宗實錄』は當時すてにすこぶる評判は香ばしくなかつた。

禁中のことをしるして切直にすぎたため、官官の憎しみがかゝった。ただと辯護する向きもある。當否はしばらくおいて、柳州に尻をひっぱたかれるまで筆を取ろうとしなかつた退之はゆめにも史に逆上專注したとは言い難く、高閑のデイレッツタンチズムを噓えた義利ではないのである。とはいへ、人は己の前言にさううまくは複合させるために生きられるとは限らず、蟲の好く好かぬは、どう放り出しては南北をさす磁針のようにかえがたい頑固さをもつものだ。史官としては人のひそみを買つたこと、それもそれがどうにも嫌だつたものならやむをえず、詩文にはなかりふりかまわす命を削つたところを見れば逆上專注という退之のモラルも背骨の通つたものとしておいてよいであろう。東野や長吉が「送高閑上人序」を讀んだか否かは知らぬ。たゞしそこにあらわれた退之のモラルと同じものか彼らをつき動していたろうことは疑いなく、同じ骨の縁が血肉以上に密やかな師弟の關係を結ばせたのであろう。

きて、もったいらしく、「逆上專注」とかかけてはみたが、好きで心を注ぐ分には、八公が夢にも七六歩三四歩とうなり、熊公がオイチョカブにどんぶりをさらえるとかわりはない。「好きこそものの」と下世話にくたけても、熊公八公の逆上は所詮本因坊の敵ではなく、「下手の横好き」と、さらにくたけて融通無礙の、ことわざをんなせて、この問題がときほくせるものではない。こゝらで天賦の才能とやらをもち出せば、駢文をばし折るには恰好だらうか、相帽先刻「天無功」と長吉のタンカを聞いたばかりであった。

天がもの用に立たぬとすれば、のころところは造化を補う筆、その穂先が章を尋ね、句を構み、雕蟲に老いるなりゆきを、まじまじとながめる他に手はあるまい。

夜の歌

原田憲雄譯

夜の歌

曹叡

静かな夜のわぐるしと、
耳には禽たちの鳴くこえが集ってくる
城は狐や兔の巢となり
高い墻は鳥の聲々でいっぱい
くすれた館の寥しさは
屋庭まで雑草を生い茂らせている
過ぎ去った歳月！
私は剣を提げて前庭に下り
暗いきざはしのわたりをさまよった

静夜不能寝
耳聽衆禽鳴
大城育孤兔
高墻多鳥聲
壞宇何寥廓
宿屋邪草生
中心感時物
撫劍下前庭
翔伴於階際

景星のなんと明るいことだ

私はこうくをあげて神秘的な星座を観た

北極星がひとときわキラキラと輝いている

あゝ 群を失った燕が

つまもなく ひとりぼつんと、とまっている

たれをとしとし

たれと家をつくらというのか

ふと鳴きはじめたそのこえの いたましく

私のむねに響こうことよ

感じやすくなつたころは

かつての日の思い出にみち あふれいで

歌いはじめた聲さえくぐもり

いつか冠の纓をぬらしていた

景星一何明

仰首觀靈宿

北辰奪休榮

哀悲失群燕

喪偶獨煒煒

單心催與侶

造房熟與成

徒然喟有和

悲慘傷人情

余情偏易感

懷往增憤盈

吐吟音不徹

泣涕沾羅纓

わが おもひ

夜くたちて 寝のぬらえぬに
起きいで 琴かなすれば
とほりには 月讀 澄み
ころもてに 風さやかなり
野をわたる ひとつおゝとり
林べに さぶし 鳥が音
たもとおり 何をかも見し
たまきはるこころ いたしも

阮 籍

夜中不能寐
起坐彈鳴琴
薄帷鑒明月
清風吟我衿
孤鴻號外野
翔鳥鳴北林
徘徊將何見
憂思獨傷心

あめつちは

天地は とわにほろびず
 山川も かわるときなし
 草も木も ことわりありて
 霜にいたみ 露にさかえぬ
 人はしも くすしといえど
 ひとり そも しかほありえぬ
 たまたまに 生けろう見るに
 たちまちに 去りて 帰らず
 人ひとり かけしとだにも
 うからうも 友も しぬばじ
 ただあます ひごろのたぐき

陶 潜

天地長不没
 山川無改時
 草木得常理
 霜露榮悴之
 謂人最靈智
 獨復不如茲
 適見在世中
 奄去靡歸時
 奚覺無一人
 親識豈相思
 但餘平生物

目にふれて　こころいたくも
天馳けん　すべしなれば
われもまた　かならず死せん
あわれきみ　わかすすめん
とよみきを　さはないたみそ

劉柴桑に

人の世を遠くありへて
うつつなし　時のめぐりも
おひたたし　くわりんの落葉
あわれ　はや　秋のいたれる
あらたしき　葵はさかえ

舉目情悽洒
我無騰化術
必爾不復疑
願君取吾言
得酒莫苟辭

陶

潛

窮居寡人用
時忘四運周
攔庭多落葉
慨然知己秋
新葵鬱北牖

かぐわしき稲はそだちぬ
今日のひを たのしむなくて
來ん歳の またしあらんや
妻と子と としにたすさえ
晴るる日を遠く遊はな

家に歸る

西のべのこゞしき山に 茜雲輝きて
天つ日は地平にまじわり
わが家の柴の戸に 鳥らさわげり
千里の遠きより歸り來りしなり
あわれ妻よ子よ 眼前まなこにわが在るを見て

嘉穉養南疇
今我不為樂
知有來歲不
命空攜童弱
良日發遠遊

杜

甫

崢嶸赤雲西
日脚下平地
柴門鳥雀噪
歸客千里至
妻孥怪我在

訝しみはた驚き、驚き静まりて、また涙を拭う
世亂れてより、われ、風塵のごとくさすらい
思いきや、今、生きて還らんとは
隣人らのごとく、垣根につどい
なげかい、あるは、すすりなけり
あわれ、わが妻、夜ふけてさらに燈とり
わが面をてらし、まじまじ見つめて
夢ならぬか、と呟ける

獵を観る

風勁く、角弓、鳴き、
將軍は、渭城に獵す

驚定還拭淚
世亂遭飄蕩
生還偶然遂
鄰人滿牆頭
感歎亦嗟唏
夜闌更秉燭
相對如夢寐

王

維

風勁角弓鳴
將軍獵渭城

艸枯れて 鷹の眼疾く
雪盡きて 馬蹄は輕し
新豐の市を 忽く過ぎて
細柳の管に 還りぬ
雕を射し處 回看むに
空遠く 暮雲 平なり

鄭侍御が閩中に謫せらるるを送る

謫たれて去るを恨みそ
閩中をわれも過ぎしが
雁がねはいたることなく
夜々をなく猿ぞ多き

艸枯鷹眼疾
雪盡馬蹄輕
忽過新豐市
還歸細柳管
回看射雕處
千里暮雲平

高適

謫去君無恨
閩中我舊過
大都秋雁少
只是夜猿多

たたなわり山路遠きも
みんをみのつつがゆるびて
さやかなる雨めぐみ來ん
いざ行きね 身をつつしみて

東湖の新竹

かうたちを挿し籬^{まがき}あみつつみましるに
冷々しみどりほのびてささなみにかげをうつしぬ
地をかすめ清風^{せいふう}ふけばはや新^{あたら}しき秋はいたるや
天^{あま}驅^かりくれないの日はゆけど眞晝をしらぬ
ほたほたと音するきけば竹の皮おつるなるべし
見ざくれは梢まばらに透きとおる玉のみどり葉

東路雲山合
南天羣籬和
自當逢雨露
行矣慎風波

蘇軾

挿棘編籬謹護持
養成寒碧映淪漪
清風掠地秋先到
赤日行天午不知
解箨時聞聲箬箬
放梢初見葉離離

つとめゆどかにはありふれは吾は頻りにここに來て
枕ありたかむしろありにおもむくかたにしたごう

官閒我欲頻來至
枕尊勿教到處情

雨あがり

袁 華

やつと雨が霽れました

喜逢時雨霽

おやまあ 豆の花がさいているわ

忽見豆花生

カーテンにはうつすらお月さま

澹月簾櫳影

くつわむしが風にふかれてなっています

涼風絡緯聲

雙岡隨想

中 新 敬

— 徒然草を MOTIVE として —

雙 岡

私には小野道風書く所の和漢朗詠集を秘藏したというお目出度い話（
第八十八段）に盛られた兼好一流の諷刺の毒はその一部人間性に即した
普徧性によつて遠く時代を経た現代に於てすら、その辛辣な毒性作用を
中和しなければ軽減もしていかないように考える。これは元より兼好の
リアリズムが如何に人間の普徧相を透視していたかの証左であり、封建
体制下の兼好時代の人間も、資本主義体制下の現代人も要するに同じこ
とで何ら進歩も向上も認められない。今日だつて錦の袋に馬糞を秘藏し
ている人間は幾らでも居るのである。そして、馬糞だらうが宝器だらう
が何でもいい、唯それを秘藏することによつて人間というものは救われ

もし、幸福でもあり得るのである。此の矣を以てすれば内臓を透視する
眼識者や、書を讀んで眼光紙背に徹する具眼の士、必ずしも現實の生を
享受する道格者ではなく、寧ろその反對の場合の方が多い、というのも
皮肉な現象であり、「知らぬが佛」とはよく云つたものだ。平凡な僥倖に
つくづく感嘆さされることもあるが、私自身こういうお目出度さによつ
て救われていることもあり得るわけで、うっかり兼好の眼識に拍手でも
送ろうものなら、彼の批評の毒性にあてられて、豈圖らんやということ
にもなりかねないので、こういう筆をやる時でも、いつも薄氷を踏む思
いに身の毛がよだつ。だがこういう思ひは私だけではあるまい、随分高
名の先生方でも同じなのではなからうか、批評という仕事は所詮、多か
れ少なかれ対象の放射する毒性にあてられなくて済されるものではない、
それを恐れていた日には永久に言靈のさきあう秋にはめぐり会えず、い
つしも満腹の四心いをしてあまさねばならないが、兼好ほどの批評家です

う此の思ひは一ツで、それを正直に告白して呉れてゐるのが嬉しい。「毒を食わば皿までねぶれ」と云われるが、私も彼の饗宴に参して皿までねぶる覺悟である。そして最もリアリストである著の考証家や註釋家等の諸先生方と共にもの狂ほしく徒然草に酔ひしれて見たものだ。

迷いを主としなくては享樂出來ないのは何も女性に對する場合のみではなからうし、酔うためにはさかづきの底に穴があいてゐてはならない。これこそ人生百般に通ずる「粹」の理念であり、日本人の大先達、兼好が粹法師と云われる所以もここにあり、兼好宗の有難さも、こういう甘露味を汲みとるものでなくてはなるまい。だから私は、宗教を阿片と説く左翼イデオロクの常套口吻にも一面の眞理性を認めるにやぶさかたな者ではない。

かくの如く私は兼好に教祖的性格や祖師的素質を考え、兼好宗信者と云ふに、こゝろ有難い甘露に浴したく念するものだ。吾々信者たつて徒然

尊の葉脈に流れてゐる精神的毒性には案外無關心で夫子自ら小野道風書
く所の和漢朗詠集を秘藏してゐないことは保証の限りでなくもなからう。
兼好を兼行と書くような人は論外としても「古き墳多くは是少年の人」
（等四十九段）という有名なことばの根本を李卓吾よりの引用だなどと
まことしやかに書き記してゐるのなど、これは古注を十分吟味しなかつ
たからなめだらうか。これなど朗詠集秘藏家の二の舞をふんだ役者と見
做し得る。けれども私はこういう一瑕瑾を以て直ちにその人や著書を輕
視することは出来ない。他の部面に於ては結構傾聴に値する卓見もある
かも知れないからことばやつかいである。やはりそんなことを氣にせず
熟讀して見ねばならぬのが、徒然草の註釋書というもののなのだらう。
それはさてよくとして、私は註釋家という人々の仕事振りと兼好のし
の狂ほしい筆のすさびとを對照して感ずるのだが、彼らが如何に熱烈な
兼好の信者を以て自認していても、その仕事振りのどこかに朗詠集秘藏

家としての笑うべき滑稽さを有してはいるのではないか。これが信者といふものゝ宿命なのかも知れない。兼好宗信者としての註釋者も他から揚足とりの的にかれこれ言われることはやはり宿命として甘受せねばならぬ。勿論兼好にも彼らと一脈通ずる考証癖や詮索癖による失敗はあろう。けれどもそんな事は毫も彼の価値を變ずるものではない。彼の志向した中心モラルは、やはり希有な藝術家の研ぎ澄まされた心鏡に投影した叡智であり、それは片手の煩雜な手間仕事とは凡そ縁遠いものであった。ことも考えずにはいられない。そういう兼好が生き返つて來て今日のジヤアナリズムに「汗牛充棟」もたふならざる徒然享註釈の盛況を眺めたらどう感ずることだろう。恐らく、釋迦やキリストが生きかえつて分裂抗争に寧日無き寺院や教會の發展振りを眺めて瞠目せしめられるだろうのと同じことが云えるのではなからうか。勿論寺院を否定している兼好宗に寺院はなく、彼の庶幾した草庵生活は片影すらなく、徒に注解書の

みが氾濫してゐる此の盛況を、彼の趣味観の一面であつた筈の「文章にぎっしりつまつた書物」と同様、見苦しくないものゝ一に入れて得意然と燃華微笑して居られるだらうか。彼はそれらの注釈書に自ら念願した智慧の結實を認めて例の微笑に自得することが出来るかどうかおこがましいものだ。

試みにさういふ註釋書の浩瀚を一冊をとり上げて見よう。おっしりとした手應えは徒然草一卷の手軽さとは別ものである。中を開けば細かに組んだ六號活字が砂糖に群がり集つた蟻のような旺盛さを呈して寧ろ讀者を感圧するようであり、まるで詩典とも見まがう博引傍証の盛観は、徒然草の一字一句にいつて恐るべき引用例をもつてその精確さを誇張して止まない。けれどもそれが果して兼好の求めた本質への努力としてふさわしい仕事振りなのかどうか私は斷言に苦しまざるを得ないものだ。さういふ雑音的な賑わしさに塵塚の壺ほどの美を見出して真頭く

かどうか。彼らが如何に向鉢卷的努力の正當を誇つても、それは徒に活字の鉛毒に酔える大根役者の大見榮に類するものに相違ない。要するに、そういう向鉢卷的大見榮は受験勉強の指導者として不適わしかろうが、徒然なる草庵者の心證に縁遠い別世界の感である。そういう仕事は徒然草の毒と末塩の資にまで消化し盡さねばならぬブツクメーカーの旺盛な世間智であり、そろはんからはじき出された価値の世界に屬するものであるに相違ない。彼らのあくまで健全な胃腸にかゝると兼好の毒なども、數ではなく、和漢朗詠集は兼好宗の御神体にも化けかねないものである。兼好宗の行をこういう注釋書作りを求めることも勿論立派な意味はあろう。これも外相を整える努力の一つと言える。従つて内證成熟への契機であり得ることに異議はない。だが過去におけるこうした歴大な努力の結果教祖の悲願はどれほど顕現出来たというのであろう！

そういう私は常に古典注釈家のみならず學者という種族に課された宿

命的な煩瑣性や、その煩瑣性を克服すべく素質されている鈍と根を基盤とする思辨癖に一種の権威を認めるにやぶさかなしめではないか、これは明らかに兼好が見定めていた教義やその敵性に對して取るべき方策としては迂遠ではなかつたらうか。向う鉢巻の氣負つた姿勢では兼好文學の李質探求など第二次の問題である。「つれづれ」という生活の価値内容にはそういう努力的姿勢は完全に否定さるべき筈ではないか。勿論兼好にも學究的努力はあつたらう。然し少し注意して讀めば兼好の考證癖など、やはり隨筆家としてのものであり、その識見には決して研究室の真いなどしない筈だ。従つて嚴密に言つて學究的という形容詞は當らないだらう。學究的に含まれているそろば人性などは、きり絶縁してゐることが考えられる。若しそろば人の世界に彼が道と探求したとしても、そういう作品には彼の驥足が自ら馬脚をあらわすような結果となるだらう。教祖は決してそろば人のほじける男ではない。こういう英彼の後裔

を以て目される西鶴とはやはり本質的な相異のあることをも並せて考えた。

人は隨筆といえは、何でも思つたまゝの筆まかせと考へたがるが、隨筆とは必ずしもしかく洒洒落落とした浴衣がけの氣樂なものでもなければ安易なものでもなからう。それにしても簡潔な文字で隨筆の性格を描破している有名な序段は餘りにも要領を得すぎた表現によつて、かえつて隨筆文學の本質を誤解させるような結果になつていほしないだらうか。日暮し硯に向つて、心に映り行くよしなし事をそこはかとなく書き綴つて行くような創作態度だつたとすれば後代は鹿犬兼好全集の編集に手を焼くことにもなりかねなかつたらう。

彼は大家の前に大矢數興行など打出して見栄を切るような藝當の出来ぬ人物でないことは確實だ。矢數については、もう矢を持つて的に向うのさえその怠慢心の萌芽を認めて警告を發せざるを得ない潔癖家だ。

私は俗悪々に対する反撥が彼の執筆の觸發的動機であつたことに間違いはあるまいと考ふる者であり、そこにこそ私は彼の高邁な詩精神を見出す者でもあるのだが、これについてたとえ西鶴の艶隱者の原像が兼好に求められたにしても、兼好を艶隱者の元祖として、その列傳中に繰り入れたり、その巻頭を飾るものとすゝ立つ場にも私は一考の餘地を認め、西鶴と兼好との文學者としての血縁關係はモラルよりも他の領域に於て探求せらるべき課題ではなからうか。

たとえ艶隱者が西鶴の筆であつても、彼は芭蕉の如く正統の弟子でもなく、兼好もそろばんには家徽される世俗性に反撥して來た男だけに、そろばんやの西鶴の所へ行けば、その丁稚小僧ほども間に合わぬことだらう。當時時代は貨幣の価値を意識し始めていて、兼好自身大福長者を拉し來つて道念頭揚の教壇に立たせている程であるが遂にそろばん的世帯には縁なき家主の一人であつた筈だ。そろばんのはじけない男は世

間人としては敗北者の資格を備えていると言えよう。親友頼阿に「米賜へ、銭し欲し」と冠昏に詠み工くらねばならなかつたのも成程とうなすかれる。

彼の記憶力は自ら「論語章句や八災」にその鋭敏なるを自賛したけれども、必ずしも明確ではかりはなかつたようだ。一言芽談の記憶も、そのまゝではなかつたけれど、一度彼の脳皮質を瀆過された知識は、一段と文學的にレファインされたものになつてゐるのも面白い。彼が「なにかしのい」と書き綴る筆癖も必ずしも慮る所あつての作爲とばかりではなかつたらう。もっと自然に無雑作に記憶を述べてゐるようで、あくまでモラリテの追求に忙しかつたため案外時や所や位階などに思いちがひがあつたと解すべき所が多々ある。

モンテーニユは自分の知性に極端な体系性の缺陷を誇らかに告白してゐるしジニベールも同じような缺陷を同じように誇らかに述べてゐる。

誇らかにはというのは彼らがモラリストの本質を見定めてものを云つてい
る證據だ。私には兼好にもどうやら彼らと同じような性格的な傾向があ
ったのではないかと思われる。優れたモラリストというものは洋の東西
時代の古今を超越して、そこに軌を一にした類型性が認められねばなら
ぬのではないかとさえ考えられる。

モンテレーユの場合、彼のエッセイの優位と確保するものはあたかも
盲人に鏡を觸覚が発達するやうなものでその知性の非俚俗性という缺
点のエッセイ文學者としての妙味を發揮させているという長短相即の函
數關係にその本質が強調されているように考えられないこともあつた。
こういうことは或程度兼好文學についても該當するものが感ぜられるの
だ。作家と作品の相關性を究明する場合、私は私流にこういうやぶにら
みの親兵に立つことに興味なきを得ないものでもある。シヨペンハウエ
ルとヘーゲルが犬猿もたゝならぬ仲であつたのも知性の型の差異が大きい

に作用しているのだらう。

とまれこういう着眼は私にとって枝葉末節の語句詮索をやるよりも徒然草の如き雜駁(へ?)な毒性文學を解くには好都合なのである。兼好が「紫の朱を奪うを憎む」や道眼聖の八災で記憶のあなとり難いことを自賛したとしても、それは何ら彼が學者や註解者の仲間であることを宣言することでもないのは明かである。彼の自賛は言わば天性の隨筆家の無邪氣なお愛嬌であつた。これをしも吾が佛尊して兼好を神儒佛道を打、一丸となした体系的思想の集大成者であるかのような仰山な贊辭を呈する註釋家には紐したくない。彼の素質は一部分としてはモンテーニユにもシヨペンハウエルにも、シャンフォールにも似た所がある。兼好の隨筆家の素質は先天的であり、そのために彼は學者としても寂しくても、その偉大さを發揮はしなかつた。ばかりではなく、寧ろそういうものへの不適合さが彼の「もの狂はしき」という創作の火花を散らせ、徒

然亭を完成させたのたろう。

フランスの卓抜な画家であるアングルは画家としての技量を誇るよし、せいぜい十人並の評価に豪目の一致する提琴家としての技倆の方を自讃して止まなかつたやうだが、こういう稚氣的心理は優れた藝術的天才によく見られるところで、絶對的に確認された価値の領域よりしかえ、て十人並の餘技的藝能を誇ることに、より積極的であるというつむじ曲り屋なのだ。兼好の自贊に對しても、私ほどうもやういう稚氣の愛すべきものを認めたいのである。

彼が歌人としては頼阿、淨辨、慶運と並んで時の四天王と推されてゐるか、古今傳授の桎梏内で、彼の自由奔放な隨筆家的天才は發揮するに、よすかとしてなく、兼好歌集一卷のみならず彼の名は恐らく文學史にも三等星か四等星程度の輝きしか止めなかつたろう。歌論にした所で後世かれこれ難癖をつけられ易い。私は彼の歌がまあいとは思われないが、家集は要

するに徒然草考証の資料なのである。彼の天才は歌人としてではなくジャンルを異にした隨筆の世に於て始めてその奔放な鵬翼を初ばたかせることが出来たのであろう。これはアングルに於ける色と音との關係に類推される。元良親王元日の奏賀の聲が甚だ殊勝であつて大極殿より鳥羽の作道まで聞えたといふ氣で書く彼である。こうなると兼好宗も大分神話的迷彩が濃厚に出てくる。唯單にそろは人的能力の缺如のみの問題ではなからうだ。所が兼好果してそろは人的知性の無能者だらうか。そうではあるまい。彼のそろはん―処世智の靈妙作用は當時のあらゆる二元対立の世相に如何に生きるかを身を以て示した筈だ。これは兼好解釈の大問題であるか、こういう大問題を組上にとり上げた注釈家が果してどれほどいたらうか……

備 我は何故いつまでもこゝをよこしまなやまにらみ見解をくどくどしく書かねばならぬのか。これは和漢朗詠集秘藏に對する警告ばかり

ては無い。兼好自身五十歩百歩のことを得意然と述べているては無いが、この場合そんなことは無視してもよからう。だが無視出来ない数量的考証が独特の煙幕を張つて徒然草の正しい鑑賞を歪曲せんとしている。それは不分明を彼の年譜に対する學者のそろば人的努力であり、彼の出家年代や徒然草著作年代についての考証である。

徒然草著作の年代については古くから種々論議されていて、今日では大伴定説が出来ているようだが、今なおその定説が確乎不動なものではなく、やはり多くの人々によって論議され続けている。これも彼のそろば人性の作用に他ならない。所で定説樹立の方法なのだか、従來の権威ある學者は何れも徒然草の章段に散在する史實の明示し得る十餘段を以て考證論斷しておられる。これは最も實證的で明確で根拠もしっかりしてあり、その為、學問的とし評し得るもので、私ともさういう歴史的客観性に対しては脱帽するにやぶさかな者ではないが、それとも割り

切れたものでなく、後人が誤寫したと云うようなことも云わねばならぬ所を見ると、どうも前に述べた徒然草の文學作品としての性格に対してはそういう實証主義一本の方法のみを頼つては危険が感じられない節がないでもない。とは言え、他にそういう科學的方法に勝るものがあるわけでもなからうが、唯われわれの文學的感覺の主体性をより尊重する立場に立つ時、實証主義のそらは人によつては引き出されたような論斷にはかり叩頭し難いものを考へさせられ、そういう明確な論證に對してこそ異議をさしはさむの暴を敢て犯さざるを得ないことにもなりかねないのである。というのはそのほんの實証主義のみでは徒然草の如き文學作品の位置設定にはどうも万全だとは言ひ得ない。あれほど直觀の優位性が光茫を放つてゐる作品に對しては解釈に於てもやはり直觀の権威が一應認められて然るべきだと信じ、或いは主觀論の弊に陥る危険性を敢て犯してまでも一應問題を提示せざるを得ない。私の方法は此の直觀を×

スとするものであれば、決して斷案を下すべき性質のものではないか
知れないが、それは兎も角として、一種假説の設定としてならは差つか
えあるまいし、こういう假説が余外作品解釋に自然な導入をもたらさな
いでもあるまいと信じて直感ばかりではいくら言ってみても、それは國
文學上の話題にはならない」とする、例のそろばん的實證主義の権威へ
の反撥は、幾分かほなきにしてもあらすとの、た所である。

先にも述べたように、私はどうも徒然草成立の年次を元徳元年（兼好
四十七歳）から元弘元年（四十九歳）までというような論斷にはそれが
如何に實證的根據の上に立つものとは之を、全面的には承服することか
出來ない、これほども直さず、徒然草二百五十四段を僅か十數段によ
つて論定し盡すことになり、たとえその十數段に於ては真實性を確保し
得るとしても、残る絶対多數の文段の真實性は必ずしもその中に包攝し
盡さるべき性質のものではないと考えられるのである。そして従來の説

たと、徒然草を以て、も、とちつと老年時代の著と考えているようであるが、むしろ四十代の人の筆と見る方が、内容上に見える艶氣や霸氣といふたものに相應してよいと思ふ(橋純一氏)という結論にも不同意を表さざるを得ない。徒然草に現われてゐる艶氣や霸氣は何も四十代人に限られた専有物ではない。藝術家という人間は彼が優れてゐる程換言すれば天才であればある程さういう常識論では彼らの人間性がつかめぬのではなからうか。私は徒然草を超凡の天才者の産み出したものとして、六十七十の人が徒然草を書いたとしてそこに何ら不都合を感じない。ケ―テ傳を挿くまでもなく藝術史はさういう先例なら幾らでも提示し得る筈であり、諸々の藝術家列傳は寧ろ老年の艶氣や霸氣を常識的にさう提示してゐる觀がある。現に吾々の時代としても「老いらくの戀」なといふ古よかしい新語が流行してゐるではないか……

所で私の直感に従來の評家の言われる「おつと老年時代」の著とさう

ことに、漠然と同意するものである。だから今更考證などとも私の扱てはないのだが、古人は何を以てそう云つたか知らないまゝ、私は私なりに、次の如き理由から徒然草著作年代を兼好晩年、雙田草庵時代の創作編纂にかゝると考えて見度い。

雙田は無常所まうけてかたはらにさくらうへさすとて

ちぎりおく花とならむのをかのへにあはれいくよの春をすぐさむ

兼好法師家集に見られる此の誰でも知つてゐる有名な一首とその詞書とか私の直感批評に於いては唯一の實証的資料なのだ。園太春には此の歌を記載して康永二歳七月廿七日とあるが該書は偽書だといわれるから之を以て直に兼好六十歳の作とすることは出来ないとしても、歌の持つ感覺なり、詞書に見えろ「無常所」の一語をりから六十八歳の天壽を全うした兼好の晩年早くとも六十の聲を聞いた頃の詠と見ることにさして不都合はあらずまいし、老年作製説も恐らくこういふ所に立脚してゐるの

だらう。

此の歌の感懐は彼が如何に不健康人であつたとくても四十代や五十代こそこの人のものとして考えるよりも、六十の聲を聞いた人のものとして見る方がより妥当ではあるまいか。

彼が雙岡二の丘の西麓に草庵を結んだのは何時のことかはっきりしないが、私はやはり五十の中は過ぎて、彼自身老境がひしひしと身にしみたる年頃だ、たとみる方がどうも此の歌ともよく照應するようだ。甚だ平凡なことながら以上の私の立論の根據の一つなのである。

そして晩年の兼好が此の雙岡草庵に起居してゐたとすれば、御堂仁和寺は指呼の間であり、そこにとぐろをまいてゐた僧侶の狂態、痴態が、彼の鋭敏な知性の網膜に映するのには至極当然の理であり例の有名な三聯の文段（第五十二、五十三、五十四段）の執筆は此の時、此の場所に於て書かれたと見るに不都合はない筈である。

これは文明批評家兼好に当然もたらさるべき見事な成果であり、当時政治的権力と結んで威勢のよかつた仁和寺に棲息する人間の赤裸々なる種々相に對する批評であるか、彼等の中にも身を以て宗風淨化を實踐せんとしたたらう盛親僧都の存在に對しては兼好は心からの喝采を送り得たのたらう。その盛親僧都の寺は眞乘院といふ所謂院家の一つであつたか、その所在は雙岡一の丘の西麓とあるから、兼好草庵とはほんの指呼の間と之より隣組同志とでも之えようか。当時盛親かいたわけでもないか、人傳てに彼の性向や所行を聞かされて同感禁じ難いものがある。たればこそ筆録ではなかつたらうか。

此の他お室については第二百十八段に狐の記事がある。仁和寺の境内で下法師が狐三匹に喰いつかれて負傷したといふのである。一匹は仕とめ一匹は切つたか、他の一匹は逃がしたといふのだ。これも恐らく人傳てであらうか、こういう話を聞いた時の老兼好の氣持を察するのはさし

て困難ではあるまい。第八十九段の猫又の奇襲にみびえてゐる連歌師の
氣持は此の場合やはり兼好の氣持そのまゝではなかつたらうか。『狐は人
に喰いつくものだ』。こういう書き出しの氣持は唯草なる人への警告でも
筆の丁寧さびでもあるまい。竈は山に近い草庵生活者として吾身に感じた
可能性への戦慄感が見逃せないように私には感じられてならない。

序でたか、私にはどうも第九十六段の蝮の毒消しに「めなしみ」が効
くことを教えてゐるのにも、唯彼の苦勞人的老婆心よりする教訓以外に
どうやら草庵生活者としての日常性を感じられなわけでもないのか
……（先に私は徒然草を目するに毒性文學の語をもつてしたか、俗悪な世
俗の毒性を淨化治療すべきめなしみ兼好の智慧の心髓はこういう毒を
以て毒を制する性格をもつてゐる。）

これたけの観兵からして私には徒然草の全部がとほとほえなひにして
も、少くとも、例證の文段が彼の晩年、雙岡草庵の机上に成つたもので

あるように思われる。そしてそれが晩年の作と見做し得る時、それは形こそ隨筆であるが、決して所謂「筆のオサビ」と云つた軽いものではない。期するところあり、その執筆であり、眞實時代を苛責する良識が、後世に遺すべくして筆を執つた遺書―後代への遺言としての性格も、その中に盛り込まんとしている彼の意圖を看過しがたいように感ずる。こゝういふ彼の集中的心焔の閃光が物狂ほしく暗々たる中世の闇を稲妻のよゝうに照破し結けたのではあるまいか。

私は先に「人傳てに」と云ふことを二度書いて、「人傳てに―この人はどんなんなみたろう。どう云う人が青白二眼流の兼好の交友として適わしいか。誰か兼好草庵の柴扉を叩き得たか。此處で私は歌僧頓阿の姿を想像して見たい。」

頓阿が貞和のころ仁和寺庵室に住していたことは彼の草庵集に見えてゐる。その庵がどの地裏にあつたか遺憾ながら知られてゐないが、二ノ

丘西麓と云えば兼好の草庵も恐らく仁和寺境内であつた筈だ。広いといつても同じ寺の境内である。氣心の合つた二人が目と鼻の先に相住んで互に行きつ来りつ、朝を夕までに清興を共にし、時には金や米の無心し之い合つた、その親交振りを思ひうかへる時、私の心は中世の暗夜にほのほの明るい燈明を見出したような氣持になる。

そして彼らの清談に仁和寺僧團の痲態狂態の種々相や乃至は狐の話等かへ二百十八段、活きいきした話柄を供し、それが兼好の筆尖に神彩の妙老を招來しなかつたとは誰しも断言できないだらう。

『羅は上下は下れ、螺鈿の軸は目落ちて後こそいみじけれ』(ハナニ段) 私にはどうもこういふ一言の吐ける頓阿という人物かたとえ徒然草には唯一度切りしか顔を出さないにしても、実は徒然草が形成せられるにいつては陰然と實に重要な役割を演じているような氣がしてならない。私には不勉強のため彼についてはその片鱗すら把んではいないが、第八十

二段の此の言葉の重たさが、徒然草の思想の重要な收約であり、明らかな
に焦真の一つであることを考えて見ても、そこに何ら不都合を感じない
筈、弘融や彼は筆好にあってたゞ音ではなさうだ。これは究明を要す
る私の重要なテーマの一つでもある。私は彼らの親交振りを乱世を背景
として結ばれた高度なモラルとしての友情の具体例としてより以上の何
ものかを考えた。

だがそろそろほんの考證家はこゝをたわごとはいくら書きつらねても、そ
こに何ら學問的基盤は固められなうと言われらるだろう。だが私は更に妄
想をたくましくせざるを得ないので、私は兼好が永い人生行路の果の老
境の身を雙岡草庵の机邊に倚せて静かに世の無常、人のはかなさを觀想
しながら徒然草を執筆している時、彼のそういう思索の机邊に朝夕訪れ
て來たものは餘韻嫋嫋たる法金剛院の名鐘「黃鐘調」であつたことにも
注意したい。(藝術的天稟に恵まれて、聽覺の鋭敏であつたこと、彼が音

樂をこよなく愛したことは徒然草の隨處に散見する。

茅二百二十段にその鐘のことを記している。こゝで彼の記述はカク平叔な様があつてあまり人の注意をそそぐないらしいが、それでも例によつて清家の筆法を駆使している。

「およそ鐘の聲は黃鐘調なるべし。……法金剛院の鐘の聲また黃鐘調なり」と。

黃鐘調といふのは云わずと知れた祇園精舍。諸行無常の聖韻である。彼が草庵裏に朝夕この名鐘によつていかにも耳根清淨を期してその思索や觀想と深め、磨いて行く、人ごとか、草庵設定の條件は外相のもつ意味を重視する兼好には必ずやきびしい何ものかありあつた。因に之う。法金剛院といふは、やはり彼の草庵から遠くはない。草庵から少し南の所はそこの境内であらう。堂塔とも三四百米東南方にあつた律宗別格本山が文字通り待賢門院の御所でもあつた。所傳によれば當時は立派な

池もあり、美しい堂塔伽藍の林泉に映えて極楽の美観を呈していたといわれる。此の幸は王朝の清原夏野公が雙岡をすら庭園にとり入れて作った別墅を幸としたのだと之われる。だから、兼好当時とて宏壯な境域を誇り、北の御堂と對峙する觀があつたらう。彼の草庵の位相はこれ地理的にはどういふ環境裏にあるか、さう解てきたらう。それなのにこの「法金剛院」に對しても學者の異説がある。「法」は「淨」の誤寫で、ちや「淨金剛院」が正しいと之うのである。そして注に曰く、「淨金剛院」は後醍醐上皇が龜山殿へ現在の天龍寺はその跡）の中に建立せられた寺とある。如何にも注釋家か迷いさうな條件を具備した寺ではある。然しその鐘かどうして兼好の日常生活と潤おすべく諸行無常の妙音を傳へ來ったと之うのたろう。私には藝術家としても宗教人としても外相のもの重要な意味を説く兼好が雙岡に草庵を設定したその心理の條件を憶測する時、こゝでもやはり必然的に法金剛院説を主張せざるを得ないので

ある。兼好当時宏壯な境内を擁して美しい塔頭輪換の美を誇ったであろう。法金剛院は今も双ヶ丘東南端に小やかを面影を止めてそゞろ時勢の推移の激しさを感ぜしめらるゝかとなつてゐる。都人士の多くはその存在をすら知らぬ。唯本堂の阿弥陀如来像（国宝）のみ尊く不易の座相に萬法流転の歸趨を照見しておわしますよ。昭和に生きる私は法金剛院によつて第二十五段を筆にした兼好の實感の百分の一に參與することが出来る。此の鐘は今妙心寺にあるのかそれかと傳へる者もある。法金剛院のものかどうして妙心寺の有に歸してゐるのか私は未だその間の消息を知らぬ。寸心西田幾多郎博士は妙心寺僧堂に參禪しておられた時から此の黄鐘調の無上津とよなく愛されて、死後は此の鐘の下に眠り度いと願われたと云ふ。因に今博士の塋域は鐘を去る數歩の地、名剎靈堂院の境内にある。

徒然草は知らず、モニターニユに傾倒し、その叢知を讚美された博士

やはり右鐘をよすがとして獨異な思索を録られたことだろう。あの格調の正しく清い無常の韻律は流行の人世に不易の妙法を教える聖境であり、私もまた遠くその波動の谷底にこだまする度にそぞろ寂滅爲樂の法悦を念わずには居られないものである。その時、あの黄鐘調がやはり兼好草庵に對しても同じく彼の晩年の内証を如何ほどか深化するに至つて大きな契機となつたであらうことをも茲せて感せずにはいられない。

私は以上のような主觀的を感性の土台に立って徒然草の全部がとは云わないが、そのあるものはどうしても雙岡草庵の筆になることを主張したいものだ。

兼好法師家集の編纂は彼の晩年六十四歳ごろというのが定説らしいが、徒然草もやはり年來彼の胸底に溜り來、た草稿を恐らく家集と相前後して自ら整理編述したのであるまいか。これは死期の近いのを予感した

文人の心事として当然の仕事であるとして見て敢て不自然ではなからう。

換言すれば徒然草は彼の心血をそそいだ一生の大事業であった。彼は家集に對して実に苦心慘澹して添削の跡をこめていそぐたが、徒然草に對しても同斷だと私は信ずるものだ。だから徒然草一卷こそ哲人兼好の生涯の叡智の結晶とも云えよう。それを「隨筆たる性質から考へて三四ヶ月程度の短期著作の可能を信ずる」とか「一氣呵成に書き上げたものと思われ」とかいう評が權威の座にあぐらをかいていゝのは啞然たらしむを得ない。彼が如何に神機奪騰するもの狂ほしい天才者であつても、あれほど人生の多面相を辛辣に深刻に掘り下げるのに僅か三四ヶ月しか要しなかつたとは思われぬ。私は寧ろ隨筆だから一氣呵成や短期著述の不可能性を考へたいのである。

成る程西鶴は貞享元年六月五日住吉神社の社頭で衆人稠座の中に一晝夜二万三千五百句の大矢數興行をものゝ見事にやつてのけた。正に超人

的な精力、誰しも啞然たらざるを得ない。だからといってこれを以て芭蕉一生涯の苦吟（恐らく一可句もなからう）の如きは十時間位で詠出し得る可能と信ずると云う人があれば、そろばん的実証學者は成る程と肯なくことが出来るたろうか。

私にはどうも序段が餘りにも名文過ぎるからこうした誤解を生ずることになるのではないかと、いう疑惑もいささかなきにしもあらずである。一見序段は隨筆の性格を描述して餘蘊のないものである。が、あれほど哲人の叡智の凝縮結晶になる名篇珠玉がヒロポン中毒の流行作家が一夜潰けて書き下した小説と混同されてはたまらぬ。如何に兼好の狂はしきを告白しているとして、中毒性作家の狂燥的知能とは、その毒性に雲泥の相違があるのである。だから私は徒然草の執筆を考へる時には序段より寧ろ第二十九段とこそ味請すれば、その中に感應してくる何ものかがあるのではなからうか。

「しつぱに思へばよううに過ぎにしかたの戀りさのみぞせんかたなき……
残りおかしと思ふ反古などやりすつる中に……此の比ある人の文だに、
久しくなりて、いかなるを、いつの年なりけんと思ふは、あはれな
るぞかし……」

「残りおかしと思ふ反古——これは唯の反古ではない。詠歌を推敲した
草紙が、徒然草の草稿か、としかく藝術的にも求道者としても美しい良
心に於ての世事振りが想像出来なうか。此の段に双丘草庵裏にあ
つて老境塗心の兼好が静かに自らの人生を整理してゐる心境を請ふとく
たく念ずるのは果して私だけなのだらうか……」

以上私はなごたごたしい足どりながら、兼好宗のメツカ順禮の道しるべ
をやつたのである。

志 向

私は先に徒然草を總括する性格として、それは一種の幸福論であることとを指摘しておいたが、これはとりもなみ私のおさず私の徒然草に対する立場の問題をし表明している。

兼行の生きた時代も、今日と同様不幸な時代であった。二元相剋の奇を闇性が社會のあらゆる分野に於て猖獗を逞うした時代である。そういう時代に人間は如何に生きるべきか、何に實存的な憑依を見出して風前にさらされた燈火にもさし似たる自己の主体性を守らねばならなかつたか、生きとし生けるものは必ず太陽を志向する、向日性であるといわれる。太陽のない時代に、中世の夜闇に、人間は如何なる燈火を求め、へきてあつたか。如何なる向日性を求めるべきであつたか。こういう課題に對する心血をそそいだ人間記録、狂乱の中にあつて幸福の所在を求めた偉大なるヒューマントキュメントとしてこそ中世の隱者、草庵生活者

の獨異な存在理由が強烈に首肯されねばならぬ。もとより兼好法師も
そういう第一人者であつたればこそ、之うまでになく、時代に對する兼
好の姿勢は道世僧であり、隱者であり、草庵の生活者であつた。外相の
権威を認めて内詮の熟成を期した兼好の智慧を支配したのは王朝宮廷の
美的生活でもなければ、有職故實の趣味生活でもない。もちろんさうい
うものし旺盛に攝取されたことだらう。かゝる氣質的に冷厳なりアリスト
てあつた彼の生活の第一義は決してさういふ退嬰的な姿勢に於てのみ把
えらるべきものではなかつた。徒然草と趣味論とか教養讀本とか處世訓
とかする立場は、兼好というカオス的人間の一面相を一人一人で云ふと
僻見に墮し易く、彼の眞面目から之を餘りにも末端に拘泥してゐると
評せざるを得ない。佛教の無常感や老莊の睿智、白楽天の詩想、その他
東洋のモラルが兼好の鋭敏な藝術的資質によつて峻嚴に選擇せらるべく
草庵や縮衣圓頂を外相とする一ほみの中で一丸に鍊金せられ凝果せしめ

られて見事な叢書の結晶を形成したものの、それが徒然草である。こういう
う多元包攝の知性的筆鋒が巻頭より下やう物狂ほしい律動を予言せざ
るを得ないのも當然の理としなくてはなるまい。

幸福論とか人間論とか云えば、何か外國流の派手に扮装をこらした親
身を考えて、聞いたたゞけて反感を感ずるような人々が所謂徒然草の愛讀
者の中に餘りにも多いことをよく知っている。私は何れもそういう人々を
どうのこうのと言うのではない。趣味論者は趣味論として、世俗的を苦
学人は處世訓としてこれを讀んで少しも差支はない筈である。と共に、
私の幸福論も亦、或は些少のハタ臭さは拭うべくもよるまいとしても、
私は私流に兼好の心髓に肉迫して、人間（日本人）の普遍的課題として
モラルのアリハクを究明して、今日の私の主体性確認に積極的に意義あ
らしたたく念願するものである。

扱、欲念を捨脱した筈の隱遁僧兼好の冒頭の言が、人間欲望の否定的

を分析するより、寧ろそのありのままの現實肯定であり、法師らしくもなく、眞向から打ち込んでゆく態度は軌範性の強い中世文學の旧殻を打破せんとするルネッサンス胎動としての性格を認め得べく痛快の上もない。これは日本文藝復興史を描くならどうしてその巻頭に自由人兼好法師を特筆大書せざるを得ないと考へるものである。

人間と生れて望ましい欲望の数々を並べ立て、その何れに対しても調らかに肯定して、いやに見られる彼の立場は決してつかぬらしい。表面相の戒律僧とは正反対で、吾々俗人にも好感がもてる。その開放的な立場には、成る程驚かそうなチカセるに十分だ。所かその中で、法師はハクウらやマスターからぬものはあらじ、人々には木の端のやうに思はるゝよ」と清少納言がかけるも、げにさることぞかし。いまほひまうにの、しりたるにつけて、いみじと見えず、雑習ひじり、いひけんやうに名聞をるしく、佛の海をしへにたかよらん、とそあほゆる、という一節は、

自ら一介の僧侶でありながら、こういう同類批評の苛酷さはどうだ。坊
主は坊主でもピンからキリまであるんだよ、といった。口調は、續けて
「ひたぶらの世でて人は、なりなかにあらまほしきかたもありん」と
結句。自分の緇衣的外相の肯定を展開させるべく伏線としての緒をなし
ている。私、おこかれも正しくこゝにありませよと、草庵に佛道専念の
眞實生活を送る隱適僧に對してこそ如何にもつゝ、ましやかにてはあ
るが、眞心からの讃辭を送つてゐるようだ。

所が此のことは、前の法師罵倒の言葉の激しさに対照されると、如何
にして、ましく抑割されてゐるために、案外「眞の世捨人の肯定は何かお
そえりの附加へられてゐるだけ、この段の直接問題ではない」とい
つた文致である。など、権威ある教養論者からですら軽く見過される懼
れが多分にあることと注意したい。此のひたぶらの世捨人が兼好の心の
中にとれほどの重さをもつたのか、は後段をまゝで兼好の巧妙な手段によ

リ陰然その風貌がクロースアップされてくるように書かれているのである。此の「あらまほし」こそ、実は第一段のみでなく、徒然草全文段と貫通する一巻のライト・モティーフであることに氣付かねば徒然草というの心髓に觸れぬとは出られない。また彼の「もの狂ほしき」を解き得る所以でもないと思ふべきだ。

此の「あらまほし」こそ求道者兼好の悲觀であつたと云わねばならぬ。宗教者兼好はひたすら世捨人に時代の重壓に抗し得る実存の權威を見出していた。そして、その「あらまほし」を執拗に追及し度いからあつたか、そのためには一方彼は餘りにも鋭敏な藝術家、詩人兼好としての宿命的な性格をも内包していた。兼好一個人の中でほいても此の宗教家と詩人が相剋し合ふべく宿命された。換言すれば兼好の中には謝靈運と惠遠とが住んでいた。此の百八段は恐らく兼好にとつては痛烈な自己批判であつたらうと私は解する。云わば兼好の生きねばならなかつた

時代や世相もさることながら、小宇宙としての彼の内心こそ相対する二元の戦場であつたのである。時代も大きな二元の戦闘場裏であり、そのための隠道でもあつたものと、生れなからにして彼ほこつといふ星を背負わされていた。彼の筆のすざびがあやう物狂ほしい心理の波紋を描いて乱れ勝ちなのも偶然ではないのである。がこれほ、徒然草の矛盾の問題として徒然草解釋に於ては觸れるべき機會が餘りにも多過ぎるから、こゝでは、その矛盾性は彼にあつて、先天性と時代環境等とが錯綜する所に二重者の様相を呈して發生する性格を注目するに止めて、再び例の「あらまほし」を追究してみたい。

「あらまほし」何という抑割された謙虚な意志の表示だらう。「あるかなきかに問さしこめて、まつこともなく明し暮したるさるかたにあらまほし」(第五段)と云い、「人と生れたらんしるしには、いかにもしてせまのかれんことこそ、あらまほしけれ」(第五十八段)と同じ「あらまほし」

を疊みかけて強く打出している。同じ強調であつてし「勢猛」の、しる
ことの嫌な癖好の態度は徒然草構想にあつて、實に見事な行文の成果を
擧げてゐることに感心する。これは明らかに「平家」にあつたれば人にあ
らぬ」といつた語氣とは此の如く違ふ。それについて、何と讀者の胸に浸み
渡る柔かな、そして温い手法たらうか。「こんな末法澆季の世へ申なら世
を捨てるこそを良心的な生き方なのだ」と相当強烈な口吻に感ぜられる筈
であらう。そして「是法法師は淨土宗にはあらずといえども學匠をたてず、
たゞ明覺念佛して、やすらかに世を過す有様、いとよらまほし」(第一百二
十四段)と自分の欲求する理想の生活態度が交友是法法師の念佛三昧の
專念生活に見現されてゐるのを讚美してゐる。此の一段の意味はそゝ字
數の僅方を以てする實に重いと之ねばならぬ。このように彼を希求
する隱適者としての眞實生活は「よらまほし」といふ一見微温的な憧憬
の一語に於て、すらすらと四度も重疊のレトリックを駆使せしめることによ

つて担われた効果は夫數を惜む彼の文學に考えるとき唯事ではない筈だ、
これは彼がいかにも痛切にさういふ生活をあこがれたかという陰約の間の
告白に他ならないてあろう。

人間は誰ても自分にないものにあこがれる。「ひたぶるの世捨人」にな
るためには彼の心内に葛藤する二元性はたしかに大きな障害ではなかつ
たらうか。そして彼は自ら到底手の届かない高嶺の花として、草庵者の
モラルをあこがれ、血を吐くような思ひで、怠慢を自分を嫌惡し、叱咤
激勵している。第百十二段の文字の過激さのほ所以なきことではまい、と
私は解する。さういふ氣質的矛盾は、彼の健康なる問題以上に深く追
求さるべき根本問題だと考へる。所で一方、彼は自らの主張を激越な口
調で威猛高にちめき、のべしたりするには餘りにも詩人としての氣質
が高揚的であつた。彼は減多にむくつけな表現はしない、それをいとう
程の繊細な感性の持主であつた。トラツクに抗聲をとりにつけて自分の

姓名を大書した画餅的公約を押しつけがましくどなり散らしながら走る
ような藝当は彼には到底出来まいわぶでもあつたさう。

いかにもおだやかな「いまは猛にのりたる」ことに反感する教養人の
敬愛と謙虚を失わず、彼の運筆の用意は陰微の間に、生命の静かなた
ゆたいを歌い上げることには成功している。草庵文學者として兼好の面
目はその氣質の二元的相対を背景として此の真を見せればは意味がこ
それにはおほ「なにかしとかやいはいせすて人の」此の世はほだしもた
らぬ身にはたゞ空の名残のみをさしき」といひしこそ誠にはさし覚えぬべ
けれ（第二十段）という此の世捨人は兼好自身かわからぬ、兼好は自
分のことを反記してよくこういうことを言うとした注書が多いことにあ
きなりなり、此の世捨人を兼好自身とするふうでは、徒然草のモラルな
ど解らう筈はなく、彼の物狂はしゝなどに觸れ得るものでないことを斷
言してほゞからない。これは評者の無能の自己暴露のようなものではあり

るまいか。

「かういふ草庵生活の本質への彼の努力は一言茅葺（第九十八段）への共鳴也。乃至は高倉院の法華堂の三昧僧（第百三十四段）の一念生活態度もあり、がたく感じたことに於てもライト・モテリーフに對する助奏として、の効果は完成されていろと云えよう。

「この世のほたしもたらぬ」いたよるの世捨人として眞實一路の宗教者として生き度い心と、いたすら美を求めし詩人、藝術家としての資質は常に彼に内心に相尅して、彼の人間性を蔭羅場と化しながらも、あらゆる矛盾の形相を越えて徒然草という目もあやな絶品を物狂ほしく織成して行けたのだらう。だから徒然草は二元の対立相尅の悲劇的宿命に奔弄されるがら蹠跣たる人生行路に理想を求めて脚下の現實につまみまきながら血みどろの闘争をやつた眞人間の心境の推移を克明に記録した得がたいヒューマン・ドキュメントとしての性格をもっている。こはほどの

悲劇的記録でなくて唯筆先の才筆が何で六百年後時代の重壓下に苦惱する人間に心魂の意味を給し得よう。

彼が「唯今の一念」を血を吐く思いで強調する時は、宗教人としての兼好が詩人兼好を制壓して高揚されていた。餘りにも移り氣な詩人兼好の道草振りに業々にやして叱咤激励してゐる感であり、文學として秀れた章段は、宗教家兼好の柱礎を脱した詩人兼好が打くつらいつて唯美の世帯を道達してゐるとも解き得よう。

彼が如何に氣質の一元性にあこがれたか、是法法師にせよ、高倉院の法華堂の三昧僧にせよ、盛親僧都にせよ、或は、風戸原に思つ存分つらさき合つて倒れた、やくさほうにせよ、さういつ、單一な性格は彼の牀には「道」のモラルに直接するいさよ、具現者として一種のあこがれを築き得なかつたのであろう。それ程にも彼自身の人間性は複雑である。それは兼好の矛盾につながる悲劇的宿命であると共に、徒然草さして後 93

代を照破する大文學としての要素に基調を賦與してゐることに於いて、
いるのである。後代はこういう先人の悲劇性によつて幸福の那邊にある
かを教えられ、そして又如何なる悲劇の時代に生を享けても、その志向
すべき法燈はその哀劇の何處に於てあらはれてゐることを示教されてゐる
のである。

こういう兼好の悲劇性を理解しなければ、その趣味論も教養論も意味
がない。またカモトルストイの文學の偉大さはやはりトルストイの悲劇
的人間性の理解がなくては、片手落ち所をな、無意味なようには。

兼好の智慧

新子と銜つて何ても古註に反對する人がある。勿論古註には平板な常
識の見解や公式的道德論に陥つたものが多い、とても高人兼好の洞脈な

どうかとい得ないのが多いことには相違ないとしても、だからといって、古註の全部が全部そういふもめではなく、素直にそのまゝ、受け入れて差支ないも入ら、てかゝりあるに相違ない。第四十六段の如きもその一であらう。

「柳菴の辺に、積益の法印と號する僧ありけり。復々積益に遺いたる故に此の名を附けにける」とぞ。

「號する」といふは、此の名を附けにけり」と云つても、何れ法印自らか稱極助に號したと解し、此の僧に親近を風貌を想定して得たるを解釋せんとすは、一はもの最たるもので兼好の識見に參する所以ではないと考ふる。幾ら何でも自ら積益と号して得たるものはいまい、此の僧にやんなき苗的たりや飄遠氣があるものか。

法印と云へば僧位の最上級で、この法印、その法印を隨分いけらかし、かゝるに程度の俗物であつたと解し度い。私にはどうも兼好の例の寸鉄 98

に止らざるやうに態の物慾の如謀たと考えらる。とてし草庵裏に眞實96

一路の清貧境を望しある人物ではなさそうだが、なごさう所か、ようて正
反對の生活態度であつたればこそ、再三の笑をてはなかつたろうか。

それにして、二時河原の落首が吐き出される時代であらう。「強盜活印」

の一話に現わされた民家の寺縁を敵意はどうだらう。そしてこれに意に
「強盜活印」一個人の問題ではなさそうだが、ひいては物慾に盲いた俗物僧

の種族全体に對する、嗤んで吐き出した敵意の智慧である。此のやうな

俗物僧の有家無家が跋扈した時代をればこそ、兼好自身の筆も敵意に氣

鋒を磨かざるを得なかつたわけだ。草庵的境涯を志向する念のいやまし

た兼好にはこつこつと腹意の毒針を秘めた民家の智慧は我が意を得たりと

同調できればこそ、筆録してよかつたろう。ふいふべて諱名というものに對

する彼の世来の嗜好と墮落僧への反感を他の章段に語るとき、こつこつ

風聞を聞いた時の彼の法面のほころびを世俗の註釋家は想像することか

てきるべらうか。

私は当時無政府的憲政家に苦吟せしめられていた一般民衆の力がめら
れた嗤笑をこういう一語に痛感せずにはいられないものだ。清貧的境涯と
しての草庵生活者などに一律と入る強盜が毒牙を向けるだらう。そんな
ものには強盜の方から平に御免をこうむるたに相違ない。草庵こそ老莊
的處世智に一つから兼好の課題であり、敵意への智慧を解消せしめる唯
一絶對の解毒劑なのだ。此の段、兼好は心理的「おなほ」の効用を
教せているのである。

妙 機

序首の中には、依然草庵成立の時代が日本歴史上空前の混乱期であり、社
會し人事も變轉をまわめた時代であるに拘らず、その時代相を母胎とし
97

た徒然草は何うそのう時代の現實と取組んだ所か見られないことと奇
とし、それは彼が時代の風雲を他所に隱遁者の独善的境涯に綸安の生と
むさぼつていたからだとするやうな俗見が殊に戦時中横行していたのは
私にあまりないものと痛感するものだ。戦後の今日とて、こう之、た
観點から兎角兼好という人關係が極端に歪曲され易いことと遺憾に思う。
成る程徒然草の筆者兼好は隱遁者であつたことは間違ひなく、徒然
草が隨筆というジャンルの性格よりして、太平記の如く正面切つた時
勢の委曲と盡した描寫は見られないのは當然なのだ。そのことを以
て兼好を非社會的貴族趣味の逸民ときめてしまふのは學者の陥り易
い近視眼的短見と評せざるを得ない所だ。

讀者の眼光さへし、かりして居れば徒然草二百三十二段何れも行文の
行間、何れとて時代相が克明に深酷に浮き彫りされてゐないことにはな
いのである。唯それを讀み得るには自ら讀者の紙背に徹する程の眼光が要

求られるわけでは、彼が一個隱適僧であつた一事を以て餘りにも常識的に
平板な結論を割り出さざるを得ぬやうな見解は淺薄極まるしめたこととい
たい。

その中のみではない。私は文學としての徒然草のモラルの優位性は寧ろ
兼好が一隱適僧の立場に身を處してすう。彼の睿智の桐眼は時代と人間
の二元性から常に函数的位相に於て如何なる葛藤を演出したか。その外
相の把握に意向を注いであり。その方法論の卓抜さによりて生彩を發揮す
るものであることを考へるものである。少くとも兼好の人間なり睿智の
理解に完璧を期せんことを欲するなら、こういう彼の時代相認識の深さ
を背景とする文明。許家的性格は看過すべくもない筈であるが、從來の
批評家は此の点ともし、これは彼の隱適僧として社會より身をかゝりてゐる
生活態度から餘りにも彼の知性の偉大なる脊樫を無視して、軟弱な覺隱
者として、粹道の宗師のやうな見方はかりにこたわり過ぎていたことは

声を大にして責められて然るべきことだ。

兼好文學の脊髄のあり方と、その中のモラル的ハジメはもつと探求さるべき餘りにも達下さるうらむと禁し得ない。此を以て云わしむれば兼好は、その時代精神の良識的指導者たる存在であり、彼の叡智の志向性は中世の盲妄とつくに辛辣な獨特の炯眼を輝かせてながら主として時代の病根を苛責する良心として作用してゐることを強調したいものだ。唯、彼の藝術家としての稀に見る優れた感性が餘りにも優美な表現力を駆使してゐるので、人々はその面の魅力に餘りにも幻惑され、彼の心眼の輝きを正視出来なかつたと言わはえよう。優れた文學にはこういう麻酔性が秘められてゐることかゝるものだ。兼好の文學の物狂りさの一端は、こういう所にないわけでは無い。文章のスタイルの美が、モラルの眞を永く殺してゐたのである。今や徒然草は從來のこういう盲妄を克服して講まればならぬ古い古典である。徒然草の古典性は一に此の處に現代的全意

義を闡明せられねばならぬ。

例えば第四十一段、角茂の駿馬に盛らば、ハという彼の旺盛な時代苛虐の精神の如き、私は兼好の文明批評家として、本領を縦横無礙に描寫し盡してゐると感嘆を禁じ得ないものである。あの章段を單に競馬見物の一寸風変わりな体験話の拔擢程度に讀み過すことは彼の靈妙な文學精神の許し難い冒瀆ですらあると考ふる。

五月五日、賀茂のくらへ馬をに始まり、人木石にあらねば、時にとりて物に感ずる事なきにあらず、という重たい語に結ばれてゐる。

此の段で兼好の意圖したモラルとは、つちて言えは、いわむり坊主によつて諷刺さるべき當時の既成宗團に寄生して墮眠をひさげつてゐる僧侶一般と対照して、渠成り水到るをまゝ如く、自ら意識しないまでも、救済の妙術が既に成熟してゐる大衆の巧妙なコントラストの深刻な対照である。例によつて彼の筆は簡明直截であり、一字一句の増減も許さぬ。

なによりは堅縮されている。

此の段と單なる段の自画自讃と軽く讀み過す。その軽妙さは拍手を送つてゐるような批評かともすれば淡然草の反時代性を強調したりするのである。

此の段のモラルに輕妙さなど棄ちておくまい。其意はあるものは中世という大きな時代宿命の礫石のようには重疊してゐるのだ。されど彼は一流の教習で提示しなから時代の病理を摘抉して見せたのである。兼好は時代と人間の一面相を完璧に描破し盡してゐる。

現代は申せばない。が、これと同じケースはさらにあろう。野球見物に電柱や立樹に鈴なりになうのは同じ光景だ。我々だ、である、いう姿態で見物する人々には何かいやかしい一しよみひせてやりたいと思つたにたろうか。そんな場合「我等が生死の到来、只今にもやちらん。それさしたれて、物見て暮す。悪かなる事はなほまさりたるもの」とさうい

うな口調で應酬されたならばどうだろうか。「何だ馬鹿とやしい、手前はど
うだ」這に及ぼされるのか閑の山たるう、その当時たつて兼行の一言に
は内容的に立って決して斬新さし奇抜さもない。寧ろ兼好としあろうか
のかと考ごたいは、陳腐な紋切型の説法なのだ。然しそれを聞いた見物
人は何か心に深く食い入るものを感じたればこそ、素直に聞くことが出
来た。此の場合の見物人は群衆の一角ではなかつた。何れも一個人間と
してものと感得したものである。こゝ所に於ては時代の大きな陰影を發見
するも、鞍馬の見物人と野郎の觀衆との時代的距離を感じないではいら
れない。

今日の吾々の性で判断すれば、それは如何にも中世らしいセンターイ
メンタリズムに過ぎまいと云えるかも知れない。成る程センターメン
タリズムたる思之は、こゝに於て此の場合に閃光の如くきらめいた中世
の言語には參與するこゝが出来ないばかりか、中世の鞍馬見物の群衆の

叙者にも血がやられず看過する所以である。彼らに此の一言に感傷と諷刺とを、何れもより大きく比喩に感して聞かされたのは、次に度聞される状
景が克明な解答を供してゐる。

白氏文集を愛讀してゐた某の兼好自身、流石に感傷一辺倒に流れる安
んほさはない。現代の知識人と此、兵衛へべらでカミソリ的である。
感傷に必ず諷刺に、てか、ちりく、後まが入れらるゝところに兼好文學
の特質がある。白楽天の文學精神に通するものがあつた。

先し角も時代の中世性には此の胎動にその二面相が正確に彼の心脈のし
んぎに投影したことに間違はないかあつた。これと一片の筆を、すさむと輕視
することは中世的時代の重疊精神を解しない現代人の輕薄さを表明する
に似てゐると云つてはならぬ。

所で木の皮で居睡りしてゐた坊さんにかえらう。何度も冗漫に繰り返して
て、云うふうだが、當時の絶流音は、人の時代の盲妄に便乗した形式生

活者に此ならんか。たから、その精神生活の本質に俗人と異なる所はな
入道の上家が又筆毫等に眞の宗教生活を求めて宗園を否定せねばならん
か。た此の事情は、能程し、かり把ててい、いと、徒然筆を讀んでその
モラルの調理性に味訓することはでき、いと、毒を喰はば血までわかれの
新の通り、兼好の毒は血までわかれ、いと、味得てき、いと、何處も私
は誹調するのてある。

論流者かこん、宗教の本質を非難した、喜、宗教とは逆行現象の中は
頓悟即菩提の生活態度を實踐していたのたから、當然心ある民衆からは
指彈の對象とされていたことは想像するに難くない。彼らに『穢雜
の時代か主人の穢雜を道化者に他ならぬ、此の本の股で毛いけむり
懸、当り寫讀して見せた坊主も勿論、彼ら道化坊主の典型として捉えられ
たから、たから、兼好の筆に辛辣な毒が盛られていたこと、予想に
疑、よる、いと、然し彼は毒を、毒物注意とレ、ッテルとけり、近ハメア、

リスニ作家ではない。彼、厭望には毒性の片影すら見せない。それと喰
つてや性の胃袋で反芻して見ねは彼の毒は分り、こゝない。但自分の知性
に毒を盛ることを怠らないもののみか、彼の毒を消化して自らの毒性を
消滅する。その他は毒に当たつて病態をさらけ出さねはこゝない手合
だ。これを從來の徒然草批評の一般であつた。

公家、面前をも顧慮せず高い立場に病態をさらけ出し、それからどうに
か清純の精感の陰影にさ、えられて精神的指導會に位してゐた申せの備
信達の縮衣削理と云ふか、も處世智の特権に、こゝらう時代、嵐を何處吹く
風と吹き流しながらの物見遊山の生活態度は此の木、股にいねむる法師
に遺憾なく、その面魂が發揮されてゐる。こゝらう道化坊主にかゝつて
は高名の本、ほりも一善を輸して啞然たらざるを尋まいし「能ある馬や
い法師」とけこつた坊主のことをさうのたう。

では、さういふ精神的指導者の下にあつた民衆はどうたう。

賀茂の競馬と之をば京洛市中行事として湧きかえるような人氣を博して
いたであろうし、民衆は吾も吾もと押かけては例の好奇心から一事も見
逃さじととあり、かゝりと口さかない下馬評を飛ばしたことであろう。
こゝでも百三十七段の奈見物の群衆に對する兼好の批評を思い浮べては
しいものだ。所が市井の喧騒を嫌う隱適僧である兼好の兼好もひよゝくう
さういう場所へ顔を出している。徒然わぶる心の仕業か、これも例の矛
盾か、馬鹿馬鹿しい。彼も徒然わぶる物狂いか、徒然草の中に如何は
ど温い人間味をたき込んだか、私にはさういう面からの考察の支具は案
外さういふ所どころか、ていぶつな氣かせぬでもない。それにしては
徒然草の中に萬代不易の古典的人間味の薫香をたき込んだ兼好も、競馬
場では人間具に酔いながら、彼らの押し合ひしめき合つてゐる中に割
り込むような藝当は到底どう打出さなかつた。そこへ行くと彼は本格的
な藝當者だ。彼はさういふ場合に群衆心理の流れに合流できる人間では

ない。やはり彼は孤獨者である。彼は人垣の後の方で競馬よりむしろあき
わめき合っている人間群像の觀察の方が面白かつたろう。私には百三十
七段の思索のメモントなど、こういう場所てこういう折になされたので
はなからうがとさえ考えられるのだ。だからと云つて、彼は決して吾輩
の群衆やその心理の流動態を厭離するような立場に立てる人ではない。
彼は、ウ民家の觀察者であり、その觀察眼にはやはり彼らへの愛情がこも
つていたこと、考えないわけにはいられない。それほどの段ならずとも
徒然草と珠玉の筆すさみに心にくく彩っている。

此處で私は敗戦後食事情の極悪なころの所謂買出し列車のことを思い
出す。よゝという列車に乗り込いためには旺盛な俗物性が必須条件である。
隱者的謙讓の美德などもついていたのでは、いつまでたつても乗れ、こは
ない。鐵爲の問題だかある隱者的氣質者にはどうしてもあの刺り込んか
できない。そういう人々は、毎月わさわざフラットホームにまで混雑積

箱を極める人間の狂態を見にゆく。そして列車をいへし見送つてばかりだ。所が割込の連中の中てし一段すこまじいのかいる。そついう連中はとうしてしこれ以上連内に立錫の餘地もないとなると機関車の横に一つかまゝたり、窓外にふらさかゝたりしてしして、としかく目的の地までゆく。途中にトンネルかえらうか長、鐵橋かよろうか、そんなことは朝飯前だ。食らふとはいゝなから、その旺盛さに膾炙たつざるを得ない。此の本の股の居睡り坊主も、てういう旺盛な連中の先祖であるのかし知れない。こつ考えてくるとサトウカス、妙技はやはり何時の時代にも群衆の動向に附随する現象らしい。そしてその妙技の舞臺は、クは何時の場合にし政治の奮闘に由来する。兼好自身等百四十二段で民衆の生活苦と爲政者の心構を孟子の語にかりて説いている。やはり彼も時代も現代も同じことだ、そこには進歩も向上もない。

群衆とは何せよたろう。その正作の究明にやはり兼好のモラリス卜的

好奇心が動いていたことは争われない。群衆について彼はまるところで
その観察の記録を報告している。がこれは他の一章にゆずらう。此處に
必要なのは群衆とは何ぞ大なる一つの心理をもつ流動体だということであ
る。これを群衆心理という。一度この大河に身を投じると、人間の精神
は液體化して流動する。餘程自ら主体性とか自我性の強固を独立人で
すう、一度この流れに同じるときには、此の群衆心理の力學の法則に支
配される。支配されるのは、兼好のようには、人垣の後から冷静に彼ら
の行動を観察し得る者のみである。だから兼好の徒然わぶる心は彼と習
茂の競馬に誘うかも知れないが、彼の氣質は決して群衆の一員として
の強烈な主体性を液體化せしめたり、流動化せしめたりはしなかつたこと
はうけ合える。彼は喧騒を極める競馬場裏に於てすら孤独を自分とみ
めてゐるような人間なのだ。

兼好が「つれづれわぶる心」の何と懐きさよふ。

此の「つれづれわする心」が競馬場で群衆の中に何を發見したのか。

「木の股の法師」はすぐ群衆の批判の口の端に登らすにすまされぬ。

彼の耳にも誰かのあざけりか露骨な口調で傳わつて来た。「世のしれものかな。かくたき枝の上にて、やすき心ありて睡ららんよ。」

こゝで彼は何氣なそそうに筆を運んでゐる。「我が心にふと思ひしまと——んと思ひしまと。」私にはこの「ふと思ひしまと」かどうも曲物である。

無常諦観は勿論当時の時代思潮を色濃く彩つていたことでもあらう。彼の草庵裡の思索の焦臭も一にこゝにあつたことに相違ないが、彼はやはり群衆の背後で一種の思索をやつていたのである。例えは第百三十七段に表現されているような思索もわひしい草庵裏に夜雨を聞きながらとしてより群衆の中に孤獨を味得しなからうの思索の成果とした方が、私にはどうも彼の氣質に適わしいような氣がしてならないのだ。これには一種獨特な視法であり、彼の心理的位相としてのテーマであり得る。

だから彼の「ふと思ひしもの」は親法に於ける一つの施那であり、一つの契機であらう。

兼好は所謂坊主臭い説教の嫌いな男だ。たに相違ない。これは徒然草を讀んだ程のものなら誰だってすぐ判ることだ。その兼好が露骨を嘲笑に觸發されて吾知らず口をついて出た言葉の何と坊主臭いことよ。「我等か生死の到来只今にもやあらん。それを忘れて物見て日を暮す。愚なる事はなほまざりたるものと」

場所が場所であり、場合が場合であつてみれば、これはどうも親法の中に觸發された不覺の一言ではなかつたらうか。勿論出家者として同類の辯護論をしなければ、同類への非難を我が事にとつての自己擁護では更でない。妙機に觸發されて思わぬ口をついて出た言葉とはこういうふうな所かそれを聞いた民家の反應はどうだ。乗りそびれた者に蔑視を與え何か自分に優越を感じる買出し列車の場合の群衆ならどうだらう。

同じ群衆でも六百年間の永い間隔が群衆心理に異質的なスレをあらわしてゐるのたろうか。此の場合舞台が中せてゐることは凝視すべき演出條件でなくてはならない。だから幕の道は掃相も自らそこに中世的規範を踏んで展開される。

「何だへうす口よか、自今のこととを棚に上げるな——買出し列車の場合、先ず恐らくはこうであらう。所か思ひきや。誠にはこそ候わけい、尤もあゝかに候……」こゝへ入らせ候へ」といふ兼好とて思ひもはからぬ道行きである。

そして「所とさりてよひ入れ侍りにき」とは中世的民衆が示し得る最大な謙讓である。流動体にもこういうモラルが流れてゐたのだ。現代の民衆に果してこういう美徳の片鱗が示し得るたろうか。不幸にして私はその可能性を疑わざるを得ない。こういう常識論が、環境の條件を創して聞く人々にまで何故感銘を與えずにはおかなかつたのだらうか。兼好

の規定する公案の重要は明らかにかゝにある。こういう群象は唯の群象ではあり得ない、彼らの中には何ものか、ほらまれてゐる、彼らはそれと意識も自覚もしてゐないかも知れない。だがそれは何か一寸した契機さえ與えられたならば、こぼれ落ちる湯呑茶碗の滴水のよ様な性格のものである。群象の心理は流動体と稱はえた。正しく中世の民衆の心理は湯呑に満された水のようなものであり、それに一滴を加えると流れこぼれるようなものであった。

それでは群象、民衆の心の中に盛られていた内容は何ものなのだろうか。菩提を求め、心——救済を求め、心だ。更に時代の無常を感懐して把握していた心である。

当時の彼らは時代の虚塵に抗して人間の弱さ、みづかしさを痛感して、その救済を宗教に求めても既成宗團に何ら精神的權威に仰するもの、ないまゝ、新興の淨土宗門や日蓮、禪等にその飢渴をいやさうとっていた。

時代名のではないか。そういう時代の風潮の反映と、これほどの簡約な筆致に描き得たことは、文學者兼好のみが技でなく、眞實求道の宗教者兼好が参加して二者合体にならねば描き得る偉業ではない。

妙哉！此の妙技は兩れ、ほんまじと見ゆる昔もよき一言を吐き出すのである。兼好自らにとつての妙技は民衆の感銘を呼び醒まして妙技ともなつて効果は倍加された。

兼好の言葉は蓮香のこもつた寺院の説教壇上の聲ではない。塵俗の立ちこめた加茂競馬場の雑踏の中で吐かれた言葉なのだ。妙技は何處で何時觸れられるか分らない。人生の趣の深さもさういう一断面に求められよう。それにしては、草庵逃避の隱者として、その小乗性や獨善性が非難され易い立場の兼好の一言に觸れられた大乘性を直察して、其處に中世という時代の重疊する實在性を感じ得なくては徒然草を論人でも兼好の心通に及するわけにはゆくまい。

木下股の法師はその家徽をまっすぐに人生に所詮顛倒と轉落への
現我に充滿してゐる。それは丁度、サーカスの玉乗曲藝と同じく、人間
は脚下に絶えず定座する新しい局面に對應すべく、常に滑稽をホシた
伴身安全を求めねばならない。見方を変えればこの法師をかな味を也
ら曲芸師であり、高名の木下ほりの稱に値するし、能あるあそび法師
とし之えよう。世間に成功して繁榮してゐる俗物共は多くこういふ型の
曲藝師をみてゐる。けれども世俗性に反撥する筆好のモラルの文兵は本
よりそんを所に求めることは許さるべくもない。

心なりの讀者は此の段の「雑人」という語に貴族主義者筆好を感し、佻然
草の非民主的性格に嫌厭の情を禁じ得ないと云われる。以上の如くた
くだしい論説で更に説明の附加の用はなさうだが、一言附加したい。
一併此の段で筆好は民家を蔑視してゐるのだらうか。
彼は固らずし大きな精神的価値の萌芽を彼らの中に発見したればこそ

の執筆ではなかつたか。彼らの好意の忘れられない思い出種ならずといふ
心しらううければと。私はそのにし、と偉大なる動機を育養してほしい
と企望するものだ。

此の段の末文で

「^可かほどのことわり、誰かは思いようさう人なれども折かうの思ひかけ
ぬ心地して胸に當りけるにや。人木石にあらねば、時にとりて物に感ず
る事なきに非ず」と結んだ語をよみかき蛇足の如く評する註釋家のある
ことは彼自身、兼好の心裁に触れることの浅薄さを自白するにひとしい。
彼らは筆を惜しむ兼好にしてなせこうまで畳みかけねばならなかつたか
をし、と有筆親視すへきた。

「人木石にあらねば」……一切衆生悉有佛性だ。此の佛性の具有を發見し
た當り、民家を何て彼が愚説したりするものか。

宇教にすれば片々たる小感想文にも時代と人間との妙機は大きく描破

されて遺憾なしと評せざるを得ない、此の大きな妙様が、法然をほらみ
親鸞を生み、日蓮、道元を行動に駆り立てたのだ。そして兼好も親鸞の
見物人もやはり同じく大きな氣運に醗酵された時代の予たる真において
何ら選と異にするものではないのである。

方 向

第三號

非賣品

昭和二十九年二月一日發行

編輯發行人 原 田 憲 雄

京都市西陣區内、下長者町通、千
本西入、妙徳寺内

發行所

方

向

社